

下 黒 野 遺 跡

大分郡挾間町大字古野字下黒野所在遺跡の調査

大分県文化財調査報告

1 9 7 4

大 分 県 教 育 委 員 会

下 黒 野 遺 跡

大分郡挾間町大字古野字下黒野所在遺跡の調査

大分県文化財調査報告

序 文

この報告書は、国立大分医科大学建設に伴う事前調査の報告書であります。

建設予定地は、きわめて広範な地域におよぶため、試掘調査を含めて発掘面積もかなりな広さとなりましたが、開発関係者の深い御理解と、積極的な御協力により、予備調査から本調査と二次にわたる調査を順調に実施することができました。

しかし、日程的な制約もあって、決して満足のいく調査とは言えませんが、寒風の吹きぬけるなかを、多くの方々の努力によって、無土器時代から弥生時代にいたる貴重な遺物や遺構を発見することができました。

そして、その成果をここに「大分県文化財調査報告書」として刊行するのはこびになりました。この報告書が、今後の研究にいくらなりとも貢献すれば幸いに思います。

最後になりましたが、発掘に参加した調査員の方々、大分県、大分県土地開発公社をはじめ、種々御協力をいただいた挾間町教育委員会、地元住民の方々に対し心から謝意を表します。

昭和 49 年 3 月

大 分 県 教 育 委 員 会

教 育 長 山 本 峯 生

例 言

1. 本書は国立大分医科大学建設予定地において事前に実施した埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は大分県教育委員会が調査主体者となって昭和48年11月12日から28日まで予備調査、昭和49年2月18日から3月4日まで本調査を実施した。
3. 調査の担当は、予備調査を真野和夫、本調査を渋谷忠章が当たった。
4. 本書の執筆はそれぞれ文章の終りに明記した。実測図の作成および製図については牧尾義則（別府大学学生）君の援助があった。

目 次

I 予 備 調 査	1
(1) 調 査 の 経 過	1
(2) 出 土 遺 物	5
II 本 調 査	7
(1) 調 査 の 経 過	7
(2) 遺跡の位置と環境	8
(3) 層 位	9
(4) 発掘区の設定	9
(5) 調 査	9
1. 第 1 グ リ ッ ド	9
(一) 遺 構	9
(二) 遺 物 (イ) III、IV層の遺物	13
(ロ) V、VI、VII層の遺物	15
2. 第 2 グ リ ッ ド	18
(一) 遺 構	18
(二) 遺 物 (イ) 土 器	18
(ロ) 石 器	20
3. 第 3 グ リ ッ ド	20
(一) 遺 物 (イ) 土 器	20
(ロ) 石 器	23
4. 第 4 グ リ ッ ド	24
(一) 遺 物 (イ) 土 器	24
(ロ) 石 器	25
5. 第 5・6 グ リ ッ ド	25
(一) 遺 物 (イ) 土 器	25
III ま と め	28

図 版 目 次

図 版 第 一	予備調査（発掘風景）
図 版 第 二	予備調査（出土遺物）
図 版 第 三	第1 グリッド（集石及び下部の炉跡）
図 版 第 四	第1 グリッド（土層）
図 版 第 五	第1 グリッド（遺物出土状態）
図 版 第 六	第2 グリッド（全景及び中央の焼石）
図 版 第 七	第3・4 グリッド（第3 グリッド全景及び第4 グリッド遺物出土状態）
図 版 第 八	遺物（第1・2 グリッド）
図 版 第 九	遺物（第1 グリッド）
図 版 第一〇	遺物（第3・4 グリッド）
図 版 第一一	遺物（第3・4・5 グリッド）

挿 図 目 次

第1 図	下黒野遺跡周辺の地形と遺跡	（真野和夫作成）……………2
第2 図	下黒野遺跡附近地形図及び発掘地点	（真野作成）……………3
第3 図	第二地点グリッド調査による遺物・遺構の出土状況	（乙咩政己測・牧尾義則図）…折込
第4 図	予備調査出土の縄文土器拓影	（検爪啓史作成）……………5
第5 図	予備調査出土の土器実測図	（橋爪 測・図）……………6
第6 図	予備調査出土の石器実測図	（橋爪 測・図）……………6
第7 図	第1 グリッド発掘風景	……………7
第8 図	第1 グリッド集石遺構実測図	（乙咩・清水宗昭測・坂本嘉弘・牧尾図）……………10
第9 図	第1 グリッド炉床実測図	（清水 測・牧尾 図）……………11
第10 図	第1・2 グリッド出土土器実測図及び拓影	（坂本作成）……………12
第11 図	第1 グリッド第Ⅲ・Ⅳ層出土石器実測図	（牧尾 測・図）……………13
第12 図	第1 グリッド第Ⅴ層出土石器実測図	（清水 測・図）……………14
第13 図	第1 グリッド第Ⅵ層及び第2 グリッド第Ⅴ層出土石器実測図	（清水 測・牧尾 図）…16
第14 図	第1 グリッド第Ⅶ層出土石器実測図	（清水 測・牧尾 図）……………17
第15 図	第2・3・4 グリッド遺物出土状態実測図	（乙咩・坂本 測・牧尾 図）…19
第16 図	第3・4 グリッド出土土器実測図(1)	（坂本 測・牧尾 図）……………21
第17 図	第3・4 グリッド出土土器実測図(2)	（坂本 測・牧尾 図）……………折込
第18 図	第3・4 グリッド出土土器拓影	（坂本作成）……………22
第19 図	第3・4 グリッド出土石器実測図	（清水 測・牧尾 図）……………23
第20 図	第3・4 グリッド出土石器	……………23
第21 図	第5 グリッド出土土器実測	（坂本 測・図）……………25
第22 図	第1・4 グリッド土層実測図	（坂本 測・図）……………27

I 予 備 調 査

長年の懸案であった国立医科大学の設立にともない、その予定地の埋蔵文化財調査が県環境保健部から依頼された。場所は下黒野遺跡として遺跡分布地図に掲載されているところで、県教育委員会では、昭和48年10月4日～5日にかけて現地踏査を行ない、地形環境を観察するとともに遺物の採集に努めた。

建設予定地は面積29万2千平方 m ときわめて広大なうえに、戦後一時期開拓されたあと再び放置されたために雑木、つる草のおい茂るところとなっていたため、非常に限られた場所で遺物の採集を行なった。そのほかは数か所の切通しによって地層の所見を得たにすぎなかった。地形は東西にのびる標高110 m を最高所とする低丘陵で、丘陵南側の平野部にある水田面との比高は約30 m である。丘陵の東側は大きく入り込んだ2本の谷によって先端が分断された形となっているが、上面にはかなり広い平坦部があって、同じ丘陵続きに所在する赤野原遺跡などと地形上類似するところが多い。

現地踏査で採集された遺物は、数点の弥生式土器破片である。発見した位置は、近年大規模に松その他の樹木を移植・育成しているところで、後述するように予備調査時の第一地点に該当する場所である。切通しでの土層の観察では、表土層の下部に厚い黒色火山灰土が堆積しており、この層あるいはさらに下位に先史時代の遺構・遺物が存在する場合には、表面観察によって遺跡または埋蔵文化財の包蔵地としての徴証を得ることはほとんど不可能であると思われた。

(1) 調 査 の 経 過

県環境保健部からの調査の依頼は、昭和48年11月に正式に行われ、準備期間をおいて、同月12日より発掘調査を実施した。

調 査 地

大分市大字野田字野田1番地の1ほか

大分郡挾間町大字古野字下黒野253番地の3ほか

調 査 期 間

昭和48年11月12日～28日

調 査 者

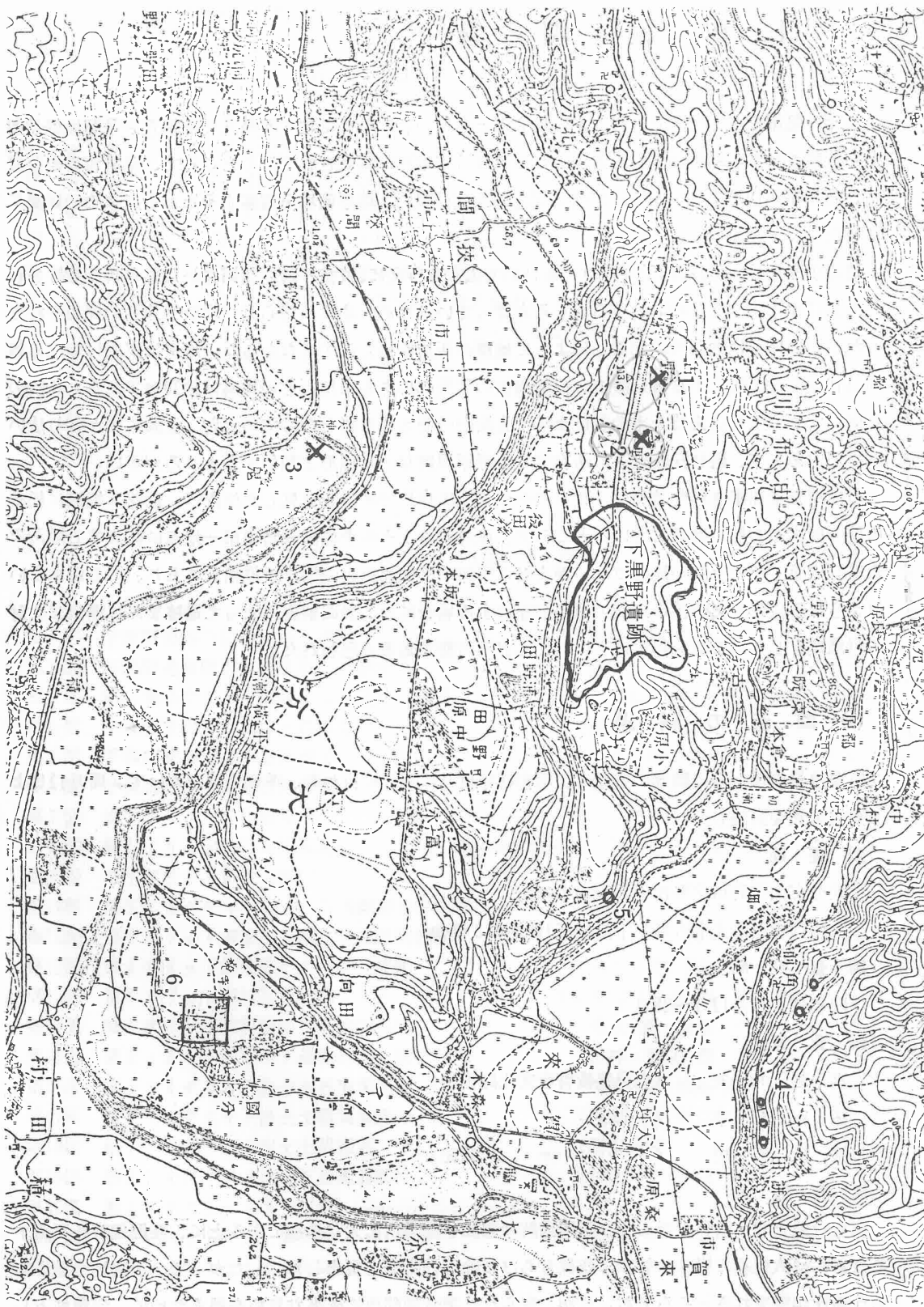
真 野 和 夫 (大分県教育庁文化課主事)

渋谷 忠 章 (”)

橋 爪 啓 史 (” 嘱託)

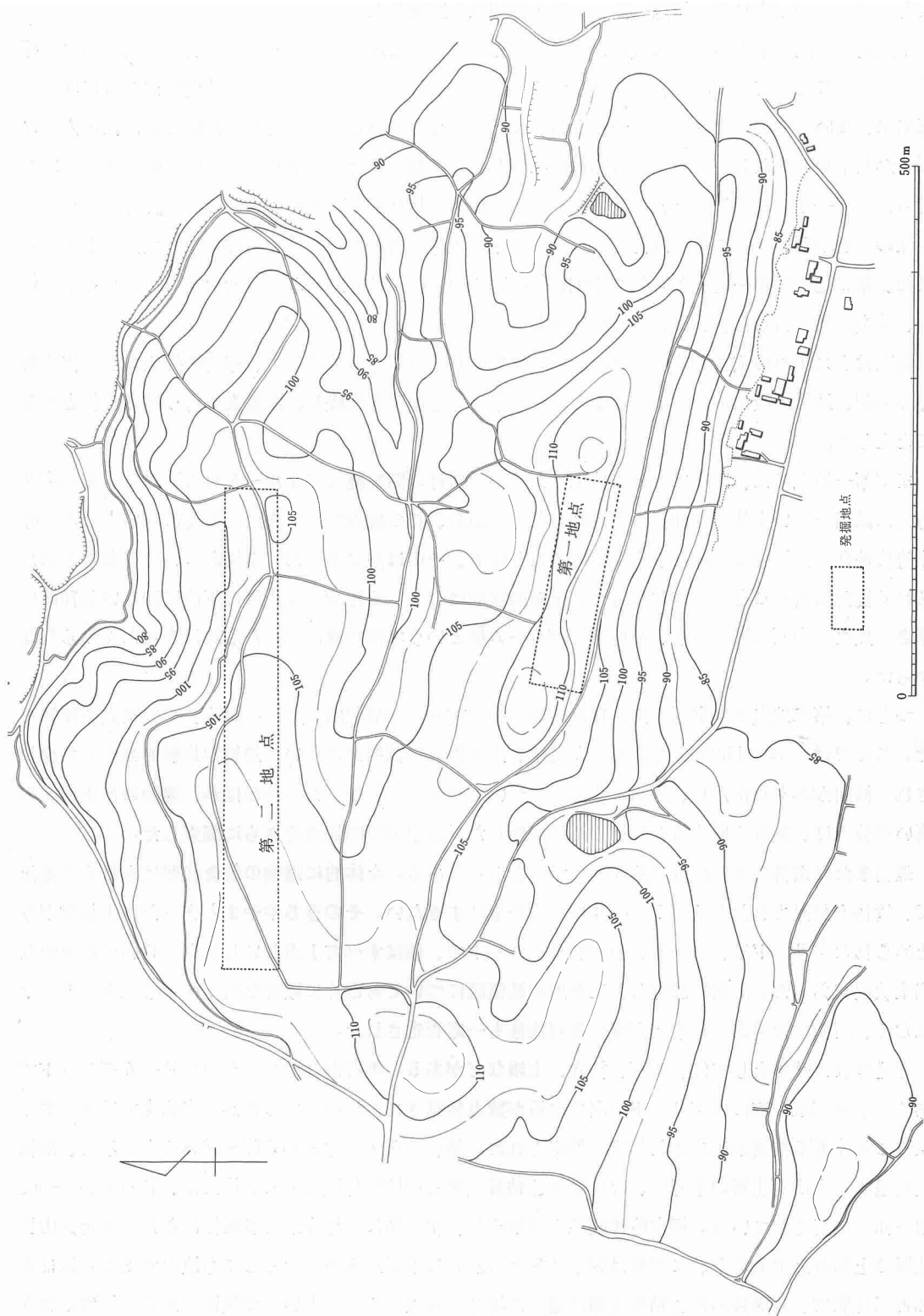
調 査 経 過

調査対象となる医科大学および附属病院の建設予定地は広大な地域である上に、発掘調査を実施するためには大規模な樹木・雑草の伐採ならびに除去作業を必要とした。したがって、予定地全域をおおう調査が望まれるところであったが、限られた調査期間内に確実な資料を得るために、包蔵地とし



第1図 下黒野遺跡周辺の地形と遺跡

- 1 古野遺跡 2 由布川小学校遺跡 3 鬼崎遺跡 4 餅田古墳群 5 中尾古墳 6 豊後国分寺跡



第2図 下黒野遺跡附近地形図及び発掘地点

てもっとも有望視される二地点に限定して予備調査を実施した。

予定地は丘陵の中央部を東西に貫いて古野から浦野田の部落へと通じる小径によって南北二つの部分に分けることができる。建設予定地となる主要な部分は北側にあって、この北側の部分はほぼ中央部にある浅い谷によってさらに二つに分断された形となっている。それぞれの丘陵頂部はほとんどならかな平坦面をなしており、標高105m前後である。試掘調査は北側部分の二つの丘陵支脈について行った。第一地点は南側の支脈にある松その他の樹木の植林地で、約50m×200mの広さがあり雑木伐採の必要がないためここを選んだ。以前に行った現地調査の際に土器片を採集した地点でもある。また、第二地点は第一地点から約200mほど北側に設定し、南北50m東西450mにわたって雑木の伐採、除去作業を行った後、試掘調査を実施した。

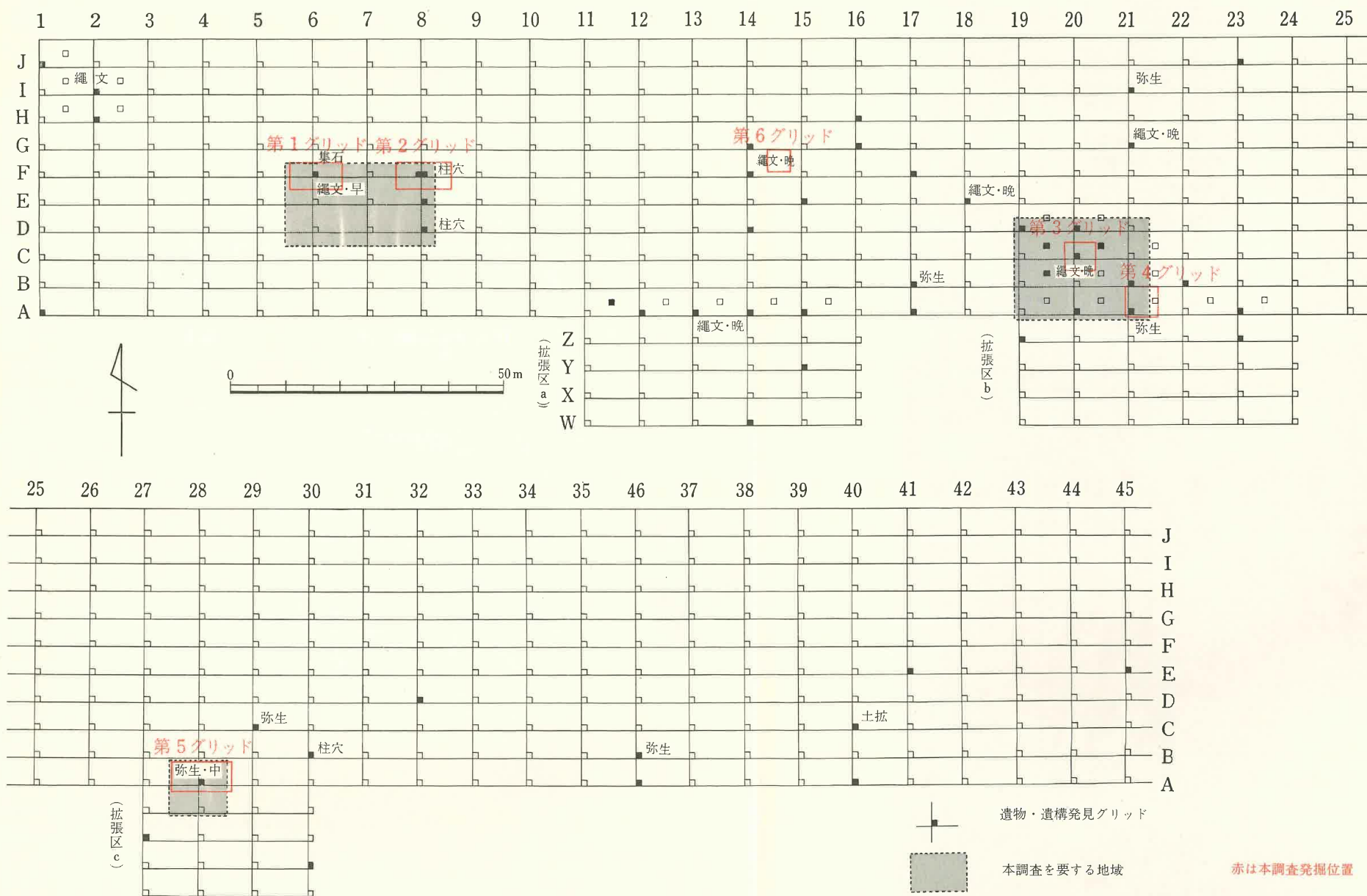
調査は1×1mの広さを地山（ローム層）まで掘り下げる方法によって、遺物の採集および出土層位の確認、遺構の検出につとめた。また必要に応じて土層図を作成し、本調査を行う際の資料とすることとした。

まず第一地点では、ほぼ等間隔に植えてある松の植林の間を縫って3m～5mの間隔で、東西南北方向に試掘を行い全体で300箇所を発掘した。しかし、この地点では中央附近表土に近いところで弥生時代後期の土器底部破片を1点採取できただけで、そのほかはまったく遺構あるいは包蔵地と考えられる資料は得ることができなかった。土層の状態は、およそ20cmの表土層の下位に30ないし70cmの厚さの黒色火山灰土層があり、その下位がローム層という堆積で攪乱された形跡はまったくみられなかった。

つぎに、第二地点では東西方向に10m間隔、南北方向に5m間隔の方眼を組み、その交点を試掘した。ここでは全体で450箇所を調査した結果、南側寄りの試掘地において遺物が比較的集中して発見される傾向がみられたため、さらに3地点について拡張して調査した。そのほか、遺物の出土密度の高い部分では、慎重を期するため、さきに発掘した試掘地の中間地点をさらに調査した。

遺物または遺構の発見状況は第3図に示すとおりである。全体的に遺物の包含状態はきわめて希薄で、遺物の発見されたグリッドは全体のわずかにすぎない。そのうちややまとまった出土状態がみとめられたグリッドは、F-8、D-20のグリッドで、他はすべて1点ないし3点くらいの散発的な出土状況であった。南側に設定した三か所の拡張区についてもとくに顕著な出土状態を示すグリッドはなく、南側の傾斜部に包含層が延びる可能性も一応否定された。

発見された遺構としては、集石、柱穴、土壇などがある。集石がみつかったのはF-6グリッドである。予備調査の際にはグリッドの隅に焼石が数点発見された状態であったが、本調査では後述するように興味ある構造が確認され炉床と推定された。集石の深さは地表から65～80cmのところで、黒褐色を呈する火山灰土層の下部で、ほぼ暗褐色粘質土層との境目付近である。柱穴は、F-8、D-8、B-30で発見されている。縄文時代晩期の遺物を包含する層は、地表からⅢ層目にあたる黒色火山灰土層の上部付近であるが、この層は掘り込み等がかりに上部からあったとしても検出することはほとんど不可能で、Ⅳ層目の褐色粘質土層に達した場合のみ検出できるといった状況である。柱穴の大きさは直径20cm前後あり、円形である。土壇はC-40から発見された。茶褐色粘質土層（地山）に掘り



第17図 第3・4グリッド出土土器実測図 (2)

込まれたもので、形状は楕円形で断面形は舟底状をなす。

発掘区全体の出土遺物からみた時代的な場所の推移は注意すべきである。すなわち、発掘地区の西側から山形押型文を伴う縄文時代早期遺構→晩期の夜臼式土器の包含地→弥生時代土器の包含地と東に向って順次場所が移動していていることである。

これらの問題点は本調査の際に遺構との関連が明らかとなれば解明の手掛りが得られるかも知れない。
(真野和夫)

(2) 出土遺物 (図版第二、第4・5・6図)

下黒野遺跡予備調査の結果、遺物は全体的にきわめて少なかった。しかし、このような状態であっても大きく3つの地区に各々時代的差異の認められる遺物の集中がみられた。また各時代の遺物の包含層も明らかとなった。各地区の層位には若干の違いが認められるが、基本的には次のような層序を示していた。

I層 表 土 層

II層 黒 色 土 層

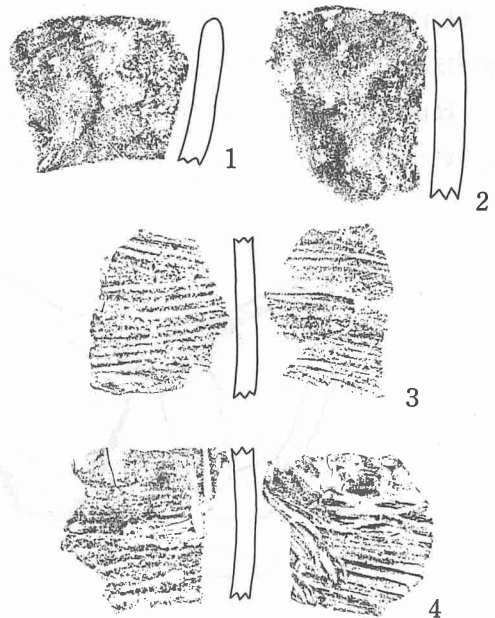
III層 黒褐色土層 (パミス混入)

IV層 暗褐色土層 (V層への漸移層)

V層 黄褐色ローム層 (弱粘質)

<第1グループ>

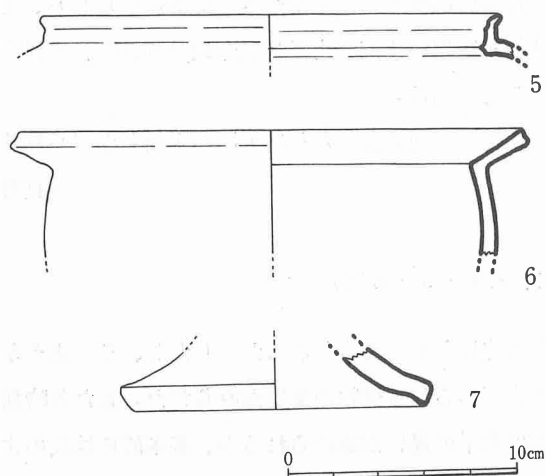
発掘区域内西側付近にあたる地点で8-D・E・F、6-Fの各グリットを中心とする。遺物は縄文時代早期土器片でIII層下部よりIV層中に発見され、これが早期土器の包含層と判断される。1・2は8-F出土の無文土器である。この種の無文土器は一般に厚手で色調は赤褐色を呈し、粗製である。同類の土器は臼杵市東台遺跡、日出町早水台遺跡、朝地町田村遺跡などから出土した早期押型文土器に伴う無文・粗製土器との共通点を指摘できる。



<第2グループ>

発掘区中央部付近の地点である。20-C・D、21-A・Bを中心とする。遺物はII層黒色土層より出土したもので、上部から弥生式土器を、下部から縄文晩期を主として出土した。縄文時代晩期土器は黒色磨研の土器・刻目凸帯文とこれに伴う条痕文土器で時代的に山ノ寺、夜臼式土器に対比

第4図 予備調査出土縄文土器拓影 (1/3大)



第5図 予備調査出土土器実測図

されるものである。

3・4は21-I、21-B出土、両者は縄文時代晩期の条痕文土器片と思われる、土器片のうちでは一番数多く出土している。5は21-B、II層出土の黒色研磨土器である。頸部の屈曲が顕著な精製の壺とみられる。6は21-A、II層中部出土。粗製で、弥生時代の高杯の脚部と思われる。

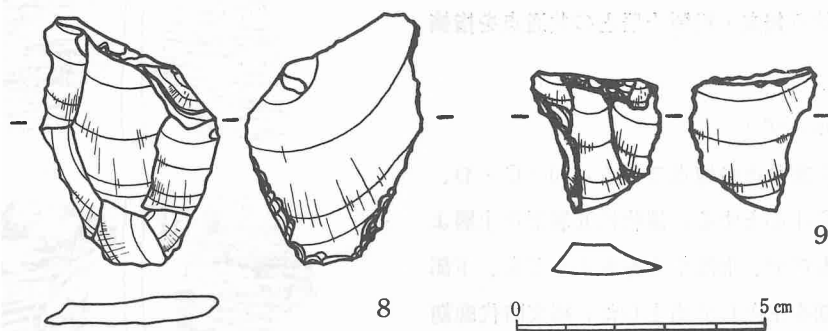
<第3グループ>

発掘区域内東側付近である。28-Aグリッドを中心に広がり、遺物はII層上部から弥生式土器を主に、縄文時代晩期土器、陶磁器片など若干出土した。弥生式土器のなかには口縁T字形を呈する須玖式土器に類似のものがみられる。

以上3地区の土器出土地に対し石器は極めて少なくわずか3点の出土をみたのみである。

8は12-B、IV層出土のホルンフェルス製の剥片である。全体にパティナが著しい。裏面下端の剝離面は新しいキズである。石質はホルンフェルスとみられる。

9は14-G、III層出土の阿蘇系と思われる黒曜石製剥片である。全体にパティナが著しいが、表面上端の剝離面は新しい。以上の他、姫島系黒曜石製剥片1点が採集されている。(橋爪啓史)



第6図 予備調査出土石器実測図

込まれたもので、形状は楕円形で断面形は舟底状をなす。

発掘区全体の出土遺物からみた時代的な場所の推移は注意すべきである。すなわち、発掘地区の西側から山形押型文を伴う縄文時代早期遺構→晩期の夜臼式土器の包含地→弥生時代土器の包含地と東に向って順次場所が移動していていることである。

これらの問題点は本調査の際に遺構との関連が明らかとなれば解明の手掛りが得られるかも知れない。
(真野和夫)

(2) 出土遺物 (図版第二、第4・5・6図)

下黒野遺跡予備調査の結果、遺物は全体的にきわめて少なかった。しかし、このような状態であっても大きく3つの地区に各々時代的差異の認められる遺物の集中がみられた。また各時代の遺物の包含層も明らかとなった。各地区の層位には若干の違いが認められるが、基本的には次のような層序を示していた。

I層 表土層

II層 黒色土層

III層 黒褐色土層 (パミス混入)

IV層 暗褐色土層 (V層への漸移層)

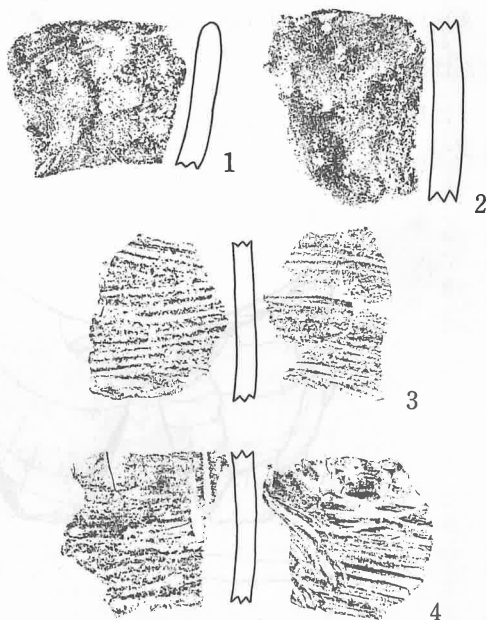
V層 黄褐色ローム層 (弱粘質)

<第1グループ>

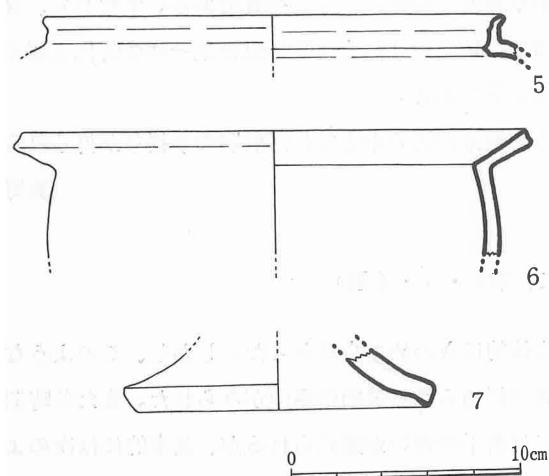
発掘区域内西側付近にあたる地点で8-D・E・F、6-Fの各グリットを中心とする。遺物は縄文時代早期土器片でIII層下部よりIV層中に発見され、これが早期土器の包含層と判断される。1・2は8-F出土の無文土器である。この種の無文土器は一般に厚手で色調は赤褐色を呈し、粗製である。同類の土器は臼杵市東台遺跡、日出町早水台遺跡、朝地町田村遺跡などから出土した早期押型文土器に伴う無文・粗製土器との共通点を指摘できる。

<第2グループ>

発掘区中央部付近の地点である。20-C・D、21-A・Bを中心とする。遺物はII層黒色土層より出土したもので、上部から弥生式土器を、下部から縄文晩期を主として出土した。縄文時代晩期土器は黒色磨研の土器・刻目凸帯文とこれに伴う条痕文土器で時代的に山ノ寺、夜臼式土器に対比



第4図 予備調査出土縄文土器拓影 (1/6大)



第5図 予備調査出土土器実測図

されるものである。

3・4は21-I、21-B出土、両者は縄文時代晩期の条痕文土器片と思われる、土器片のうちでは一番数多く出土している。5は21-B、II層出土の黒色研磨土器である。頸部の屈曲が顕著な精製の壺とみられる。6は21-A、II層中部出土。粗製で、弥生時代の高杯の脚部と思われる。

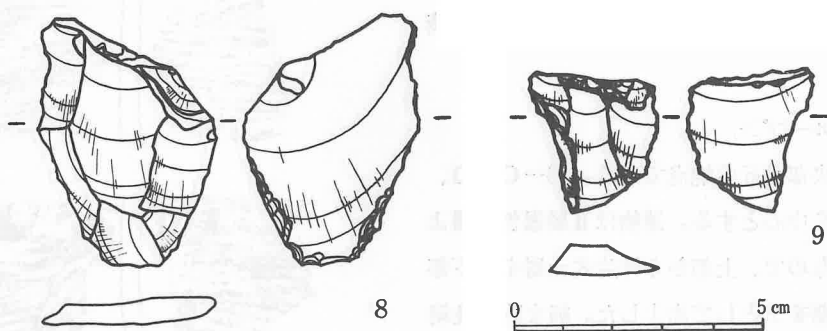
<第3グループ>

発掘区域内東側付近である。28-Aグリッドを中心に広がり、遺物はII層上部から弥生式土器を主に、縄文時代晩期土器、陶磁器片など若干出土した。弥生式土器のなかには口縁T字形を呈する須玖式土器に類似のものがみられる。

以上3地区の土器出土地に対し石器は極めて少なくわずか3点の出土をみたのみである。

8は12-B、IV層出土のホルンフェルス製の剥片である。全体にパティナが著しい。裏面下端の剝離面は新しいキズである。石質はホルンフェルスとみられる。

9は14-G、III層出土の阿蘇系と思われる黒曜石製剥片である。全体にパティナが著しいが、表面上端の剝離面は新しい。以上の他、姫島系黒曜石製剥片1点が採集されている。(橋爪啓史)



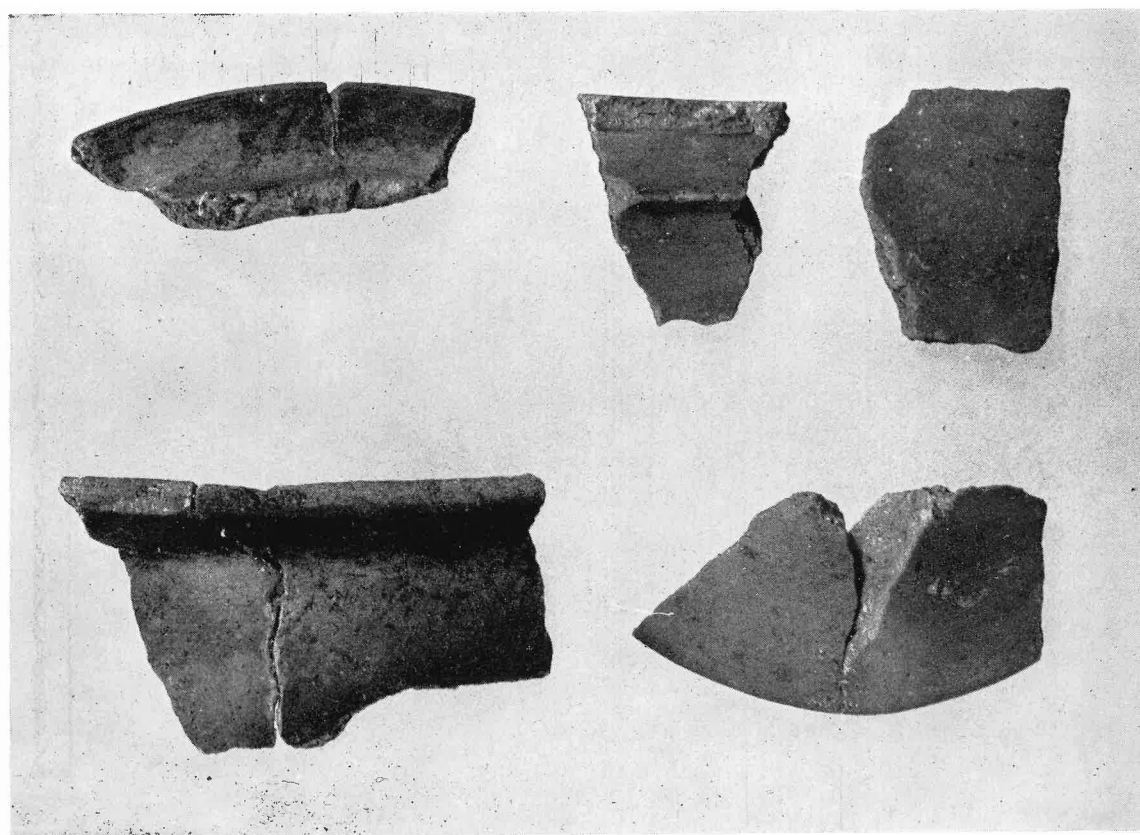
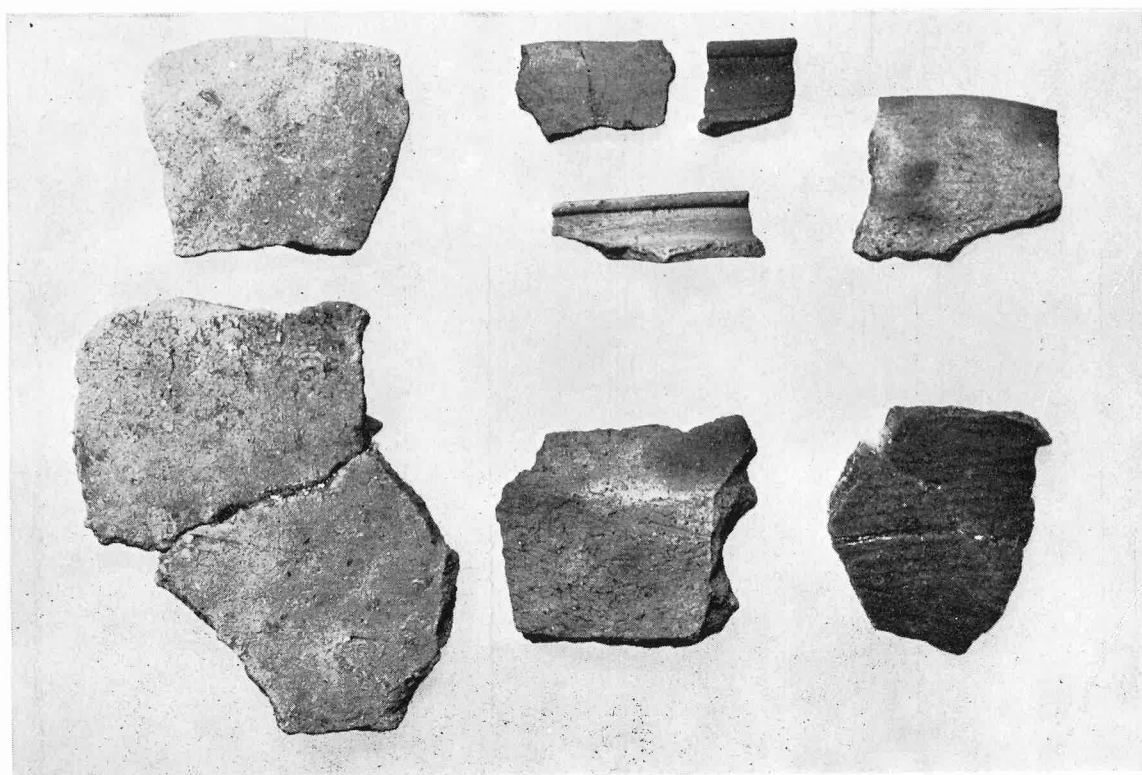
第6図 予備調査出土石器実測図



第一地点



第二地点（西方より）



Ⅱ 本 調 査

(1) 調 査 の 経 過

下黒野遺跡の本調査は、昭和49年2月18日より3月4日にわたって行われた。以下調査経過の概要を振り返ってみる。

2月18日 午後より予備調査の資料と現地を確認のうえ、第1・2グリッドを設定する。木の根が多く表土剥ぎに苦勞するが、第1グリッドで集石の広がりが見出されはじめる。

2月19日 第1グリッドの集石が、西側に散布するために4m延長する。第2グリッドでも径40cmの焼石が発見された。

2月20日 第1グリッドの集石は、一か所を中心に積み上げられた状態が確認される。第2グリッドでは数か所にピットが確認され、遺物も見出されはじめる。

2月21日 第1・2グリッド共に遺物はⅢ層下部からⅣ層上部において見出される。

2月22日 第3・4グリッドを設定する。第3グリッドでは縄文時代晩期土器が見出されはじめる。土器は夜臼式に類するものである。

2月25日 第1グリッドの礫群を除去したところ、その下部で大型礫の花弁状を呈した遺構が見つかった。また第Ⅴ層より剥片3点が出土。

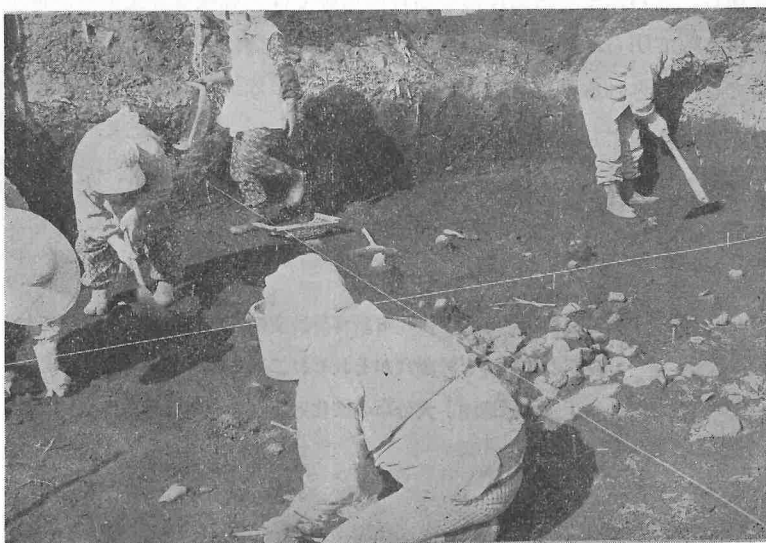
2月26日 第1グリッドⅤ層より、ホルンフェルス製剥片数点のほかにナイフ形石器を見出し、先土器時代の包含層であることを確かむ。28・30-Aを基準にして第5グリッドを設定する。

2月27日 第1グリッドⅤ層下部よりナイフ形石器が追加される。第3・4グリッドはⅢ層上部以下に包含層の存在しないことを確認、第5グリッドはⅡ層下部より城ノ越系の壺の口縁部が出土。

2月28日 第1グリッドはⅥ層の調査にはいり剥片が出土。第5グリッドのⅢ層上部以下には遺物の存在が認められない。

3月1日 第1グリッドⅦ層でナイフ形石器、剥片などが見出される。第6グリッドをG-14を基準にして設定したが遺物の出土は少ない。

3月2日 第1グリッドⅦ層下部ではほとんど遺物の確認はない。第6グリッドⅡ層下部より2～3点の土器片出



第7図 第1グリッド発掘風景

土。

3月4日 本日で作業は終了、器材撤収等を行う。

次に調査員の構成は下記のとおりである。

調 査 員

後 藤 宗 俊（大分県教育庁文化課主任）

清 水 宗 昭（ 同 主事）

真 野 和 夫（ 同 ）

渋谷 忠 章（ 同 ）

橋 爪 啓 史（ 同 囑託）

調査補助員

坂 本 嘉 弘（別府大学学生）

乙 咩 政 己（大分大学学生）

加 藤 淳 一（ 同 ）

また調査にあたっては県医務課、県土地開発公社、挾間町教育委員会、地元の方々にはひとかたならぬご協力を賜った。

(2) 遺跡の位置と環境 （第1・2図）

大分川の本流は、大分市桑原で賀来川と合流している。その合流地点にむけて標高約 100mほどの丘陵が東西にのび、大分沖積平野と接点の一端をなしている。下黒野遺跡はその丘陵の最東部に存在する。また、丘陵の西側は古野原・赤野原とつづき広大な台地を形成し、はるか北方には由布、鶴見の山々がそびえる。遺跡の北方前面には高崎山が横たわる景勝の地である。

そして、下黒野遺跡周辺には古野、由布川小学校東、由布川小学校西、鳥迫遺跡などの弥生遺跡⁽¹⁾が存在し、さらにその西側にある赤野原遺跡では大規模な弥生集落が推定され、一部が町教委の発掘調査によって明らかにされている。しかし縄文遺跡はきわめて少ない。このことは大分川流域全体についても指摘されるところである。したがって早期の遺跡になると、下黒野遺跡から東に3 kmほど離れた庄ノ原台地⁽²⁾にしかみることができないのである。

このような点からも、今回の調査によって得られた資料は、大分川流域における縄文文化の新資料とすることができる。

註(1) 昭和48年4月、挾間町教育委員会の主催によってその一部が発掘調査され、弥生時代後期の住居跡と貯蔵穴がそれぞれ二基確認された。

註(2) 「庄ノ原遺跡」大分市の文化財Ⅰ（大分市教育委員会）

(3) 層 位

遺跡全体の層位については、基本的に次の層序である。(第22図)

I層(耕作土)…約20cmの厚さをもつ。

II層(黒色土層)…30~40cmの厚さをもち、粘性にとぼしくサラサラしている。下位のIII層と同じく、火山灰土層であるが、根あるいは耕作等によって攪乱を受けている。中位に弥生式土器があり、下部で縄文晩期土器がみられる。

III層(黒褐色土層)…35~50cmの厚さで、II層よりは粘質でパミスが混入している。上部は晩期土器を含んでいるが数は少ない。下部は早期押型・無文土器がみられる。

IV層(暗褐色土層)…10~15cmの厚さで、V層への漸移層である。早期土器が若干みられる。

V層(黄褐色土層)…厚さは20cmほどあり、不定形剥片、縦長剥片、ナイフ形石器が確認された。

VI層(黄褐色粘質土層)…10cmの厚さで、縦長剥片と不定形剥片が出土している。

VII層(黄茶褐色粘質土層)…20cm以上の厚さで、上部に不定形なナイフ形石器など出土しているが、下部にはみられない。

(4) 発掘区の設定

発掘区の設定は、予備調査によって遺物の出土が稀薄ながら集中している地域が判明しているために、全て予備調査のデータを基礎にして設定した。

第一地区は遺跡の西側で、縄文早期の無文・押型文土器や集石の一部が認められている地区である。したがって、F-6グリッドを基準にして、5×5mのグリッドとF-8を基準にした5×10mのグリッドを設定した。前者を第1、後者を第2グリッドとし、その間隔は10mである。

第1グリッドは土器や集石の広がりを見るために、後に西側に3mほど拡張し、先土器時代包含層の層位的調査を実施した。

第二地区は遺跡のほぼ中央部にあたる。第一地区からは東に130m、南側に30mほど離れている。予備調査では、縄文晩期土器の他に、弥生式土器が若干発見されている。発掘区の設定は、20-Cを基準にして5×5mを第3グリッド、21-Aを基準にして設定した5×6mを第4グリッドとした。

第三地区は弥生式土器のみが出土した地区で、遺構の確認を試みて6×10mのグリッドを、28-Aを基準にして設定し、第5グリッドとした。第二地区よりさらに東に70mほど離れている。

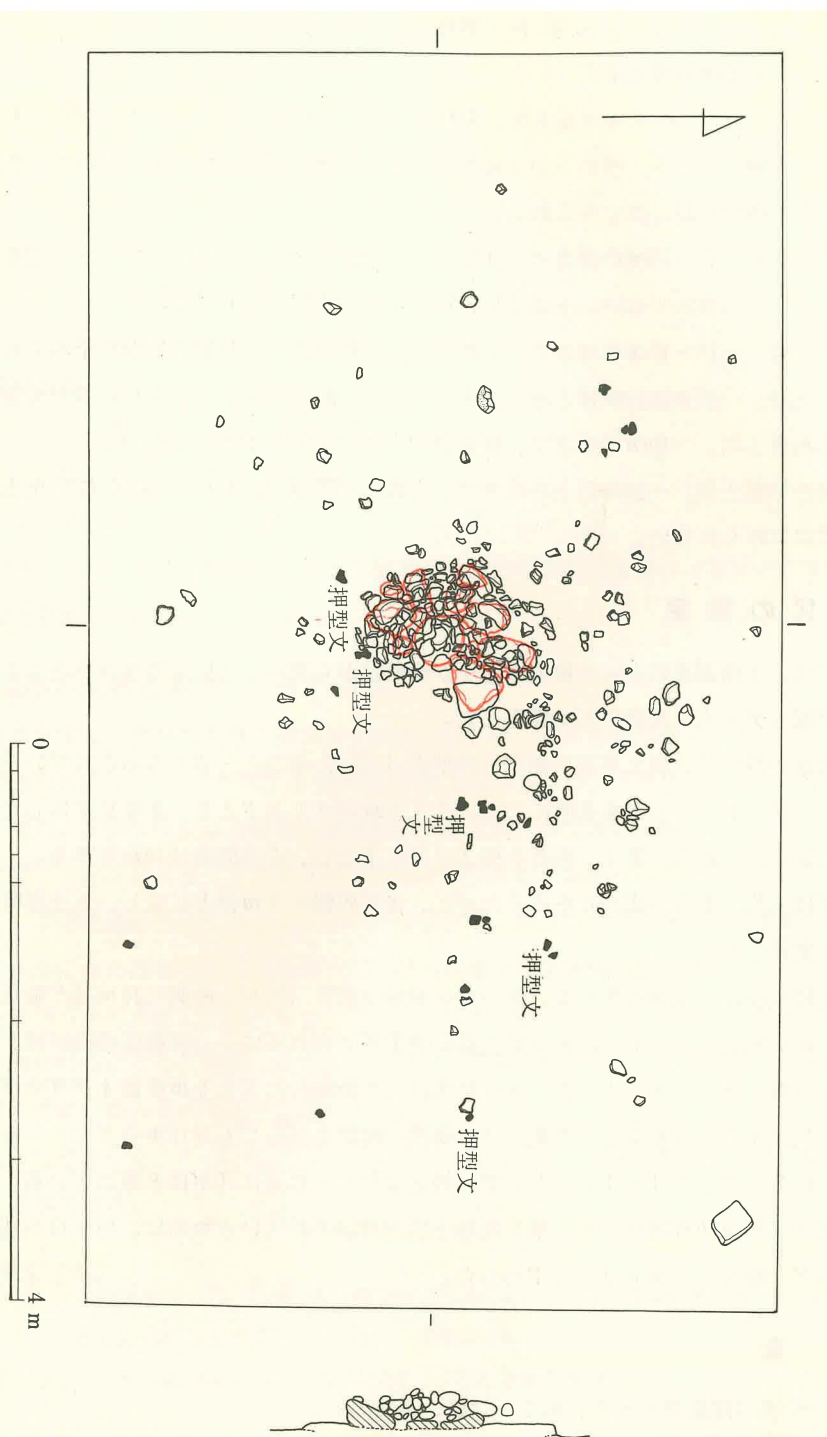
また、第二地区の西側60m附近にも、縄文晩期土器が確認されているために、14-Gを基準にして4×4mグリッドを設定し、第6グリッドとした。(渋谷忠章)

(5) 調 査

1. 第1グリッド(図版第一~五、第7~14図、第22図)

(一) 遺 構

予備調査によって集石が確認されていたので、本調査では集石の広がりや遺物の検出に重点をおいた。集石や縄文早期の遺物はIII層下部からIV層上部にかけて存在する。集石はすべて焼けており、早



第8図 第1グリッド集石遺構実測図

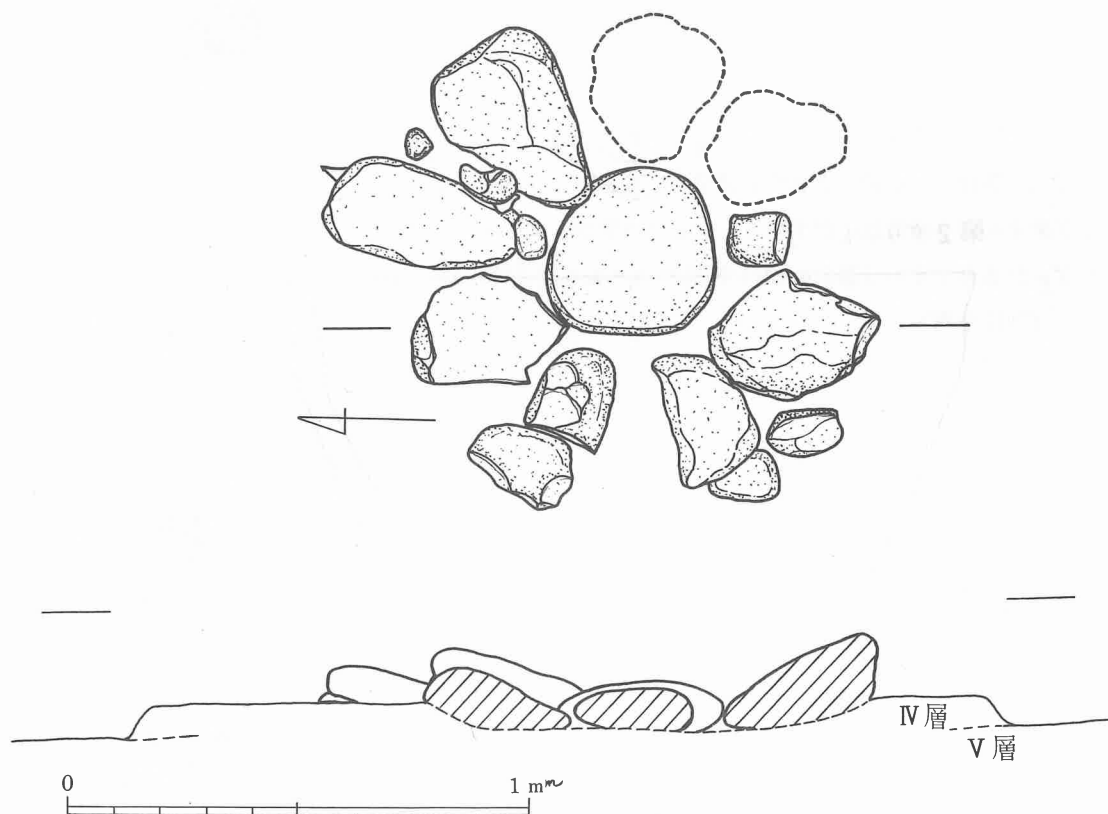
期によくみられるものであるが、平面的に密な分布はしていない。すなわち、ほぼ1 mの円形状に2～3段積み上げた礫群を中心にして、いくらかの散布をみせる程度である。

ところがこの積み上げた部分を除去したところ、IV層の上に安定した状態で、中心に径35cmの扁平礫とそれを囲んで長円礫を花卉状に配した礫群を検出した。そしてこれらの礫群は、IV層を5～6 cmほど掘りくぼめ、その上に盆状に礫を敷いて炉の基礎としたものと思われる。また小礫群がその部分の上に積み上げられた状態にあったのは、他で焼いた小礫を基礎部分に積み上げて一種の蒸焼が行われたことを示すものであろう。

遺物はこの炉跡を中心にして散布しているが、その部分を離れるにつれて稀薄となっている。土器は器面全体に山形を押捺した押型文と、指などで施文具を用いたと推定される痕跡のみられる無文土器が出土している。

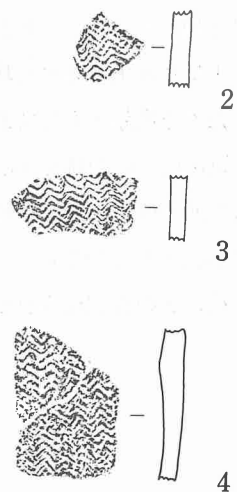
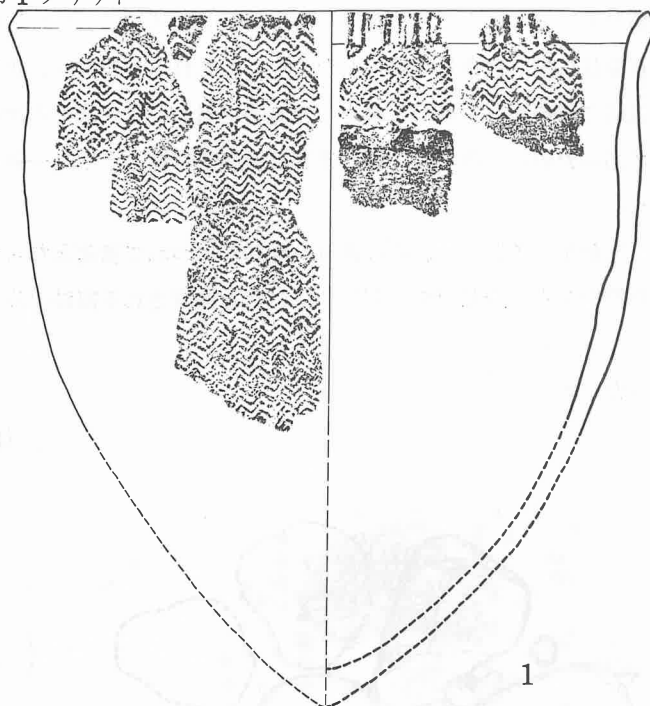
柱穴等の確認はされなかった。

(渋谷)

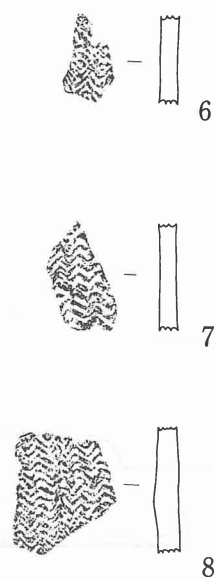
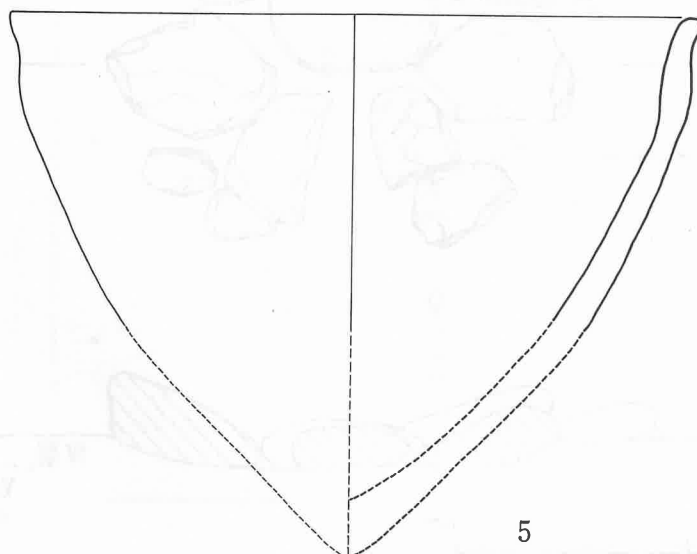


第9図 第1グリッド炉床実測図

第1 グリッド



第2 グリッド



0 20 cm

第10図 第1・2グリッド出土土器実測図及び拓影

(二) 遺 物

<(イ) Ⅲ、Ⅳ層の遺物>

土 器 (図版第八 第10図1～4)

第1グリッド出土の縄文早期遺物は、押型文土器、無文土器、剥片などがある。押型文土器(第10図1)は、全て器面に山形の原体を転がした山形押型文である。器形は口縁部がわずかに外反し、胴部は若干のふくらみをもつ尖底を呈する。口縁部は外側を切り取り成形したと思われ、その断面は尖り、口唇部下との間に一本の稜を形成している。文様は、先に述べたように山形押型文であるが、外側は全面に口縁に平行に横走させている。内側は口縁に直角に、長さ約2cmの原体刻文があり、その下位に一幅の、外側の施文に用いた原体と同一と思われる施文具により山形押型文が施文されている。胎土には、細かい砂粒を含む。焼成はよくなく、土器片はもろい。

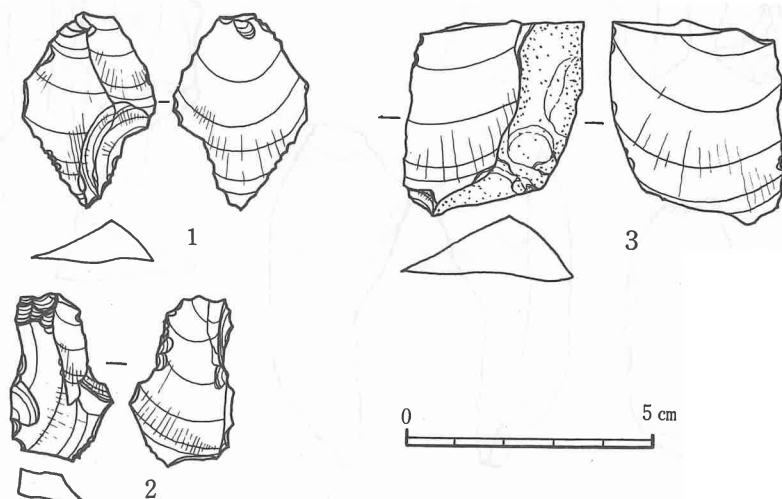
無文土器は、細片であるため、全体の器形を知ることができない。しかし、土器の製作にあたり、器面を調整するため、指などで、施文具を用いたと推定される痕跡がうかがわれる。器壁は、厚さ約1cmといずれも厚い。胎土には、細かい砂粒を混入する。焼成は、赤褐色を呈するもの、黒褐色を呈するものなど、変化に富む。

(坂本嘉弘)

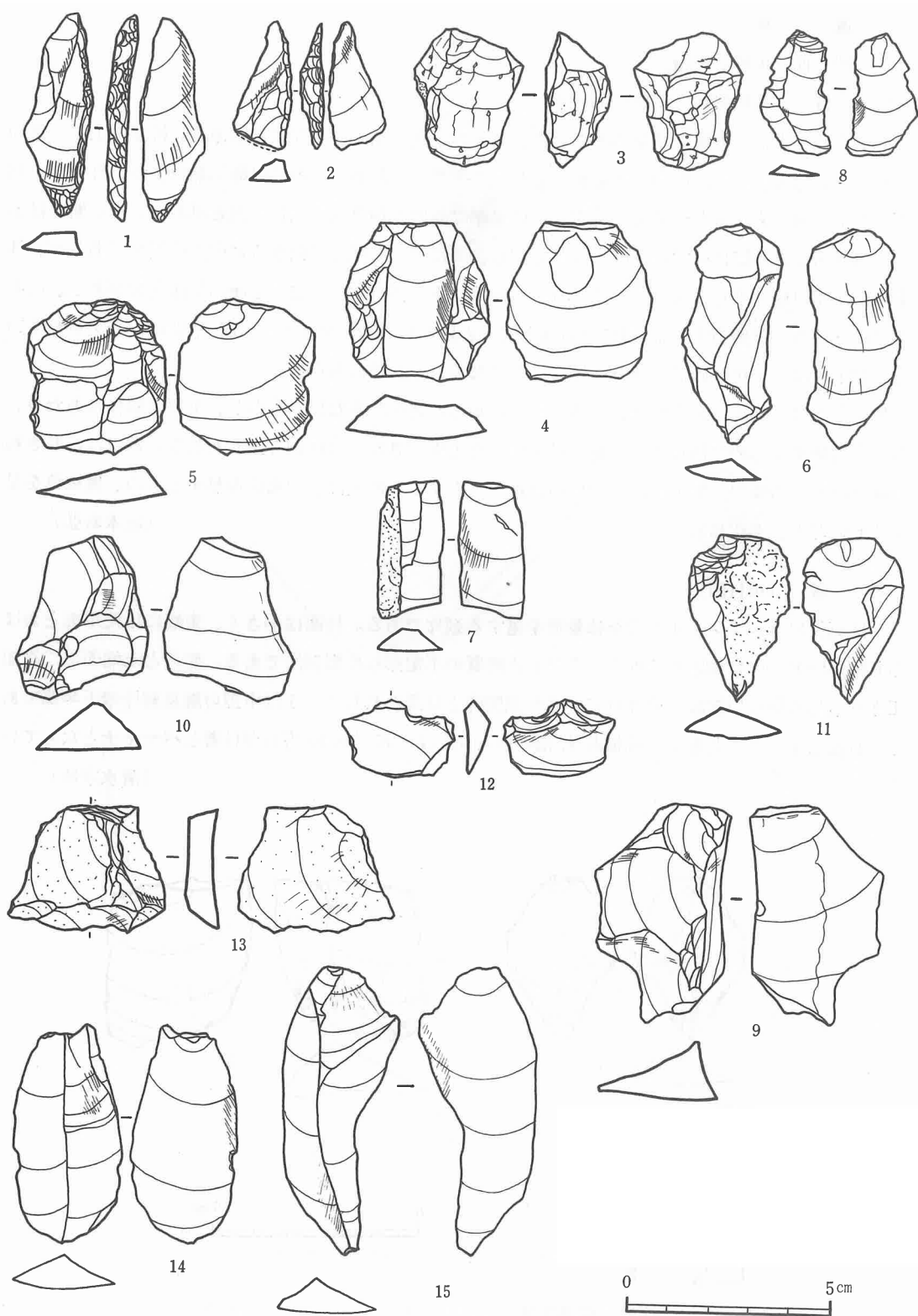
石 器 (第11図)

1は灰色のホルンフェルスの全体菱形を呈する剥片である。打面は小さく、末端には使用痕とおぼしき細かい刃こぼれが認められる。2は1と同質の不定形な小型剥片である。側辺と末端部に二次加工とみられる細かい剥離が残されているが意図的とは思われない。3は中型の継長剥片の下半部である。石質は1・2に共通す。折損面も他の面と同じように当時の汚れが付着しパティナとなっている。

(清水宗昭)



第11図 第1グリッド第Ⅲ・Ⅳ層出土石器実測図



第12図 第1グリッド第V層出土石器

＜(ロ) V・VI・VII層の遺物＞(図版第九、第12・13・14図)

下黒野遺跡における先土器時代遺物は、縄文早期包含層である黒色土層下の黄色土火山灰層より出土した。遺物を包含する火山灰層は第V層～VII層まで3層の層序を確認することができた。

遺物は、剥片が大多数を占め、若干のナイフ形石器、石核、ブレイドを共伴する。(表1)以下層位毎に考察する。

V層出土の石器 (第12図 1～15)

ナイフ形石器 (第12図 1・2)

1、2は縦長剥片を素材とするナイフ形石器である。ともに打面部を先端とし **blunting** によって打面を除去している。1は基部に細かい調整がみられ、九州型ナイフ型石器の盛行期の所産としてよい。2は基部の整形はなく、欠損した末端部をそのままとしている。1は黄灰色頁岩、2は灰白色ホルンフェルス素材とする。

石 核 (第12図 3)

3は介在物を多く含む漆黒色黒曜石を母材とする小型石核である。石質のためかネガティブバルブが不明確であるが、少なくとも4面の打面をもつ不定形石核である。

剥 片 (第12図 4～15)

V層の剥片12点のうち、4、6、7、14、15はブレイドに近い形態を示すが、真正のブレイドとするには統一性がなく、むしろ縦長剥片としてとらえた方がよい。他は不定形な剥片であり、いずれも剥離面からみて母材は複数の打面をもつ不定形石核であることが推定される。縦長剥片、不定形剥片はともに比較的小さな打面であり、打面の調整は認められず、ほぼ共通して平坦打面といえる。石質はホルンフェルスが主体であり、13のみガラス質角閃安山岩である。

VI層出土の石器 (第13図 1～9)

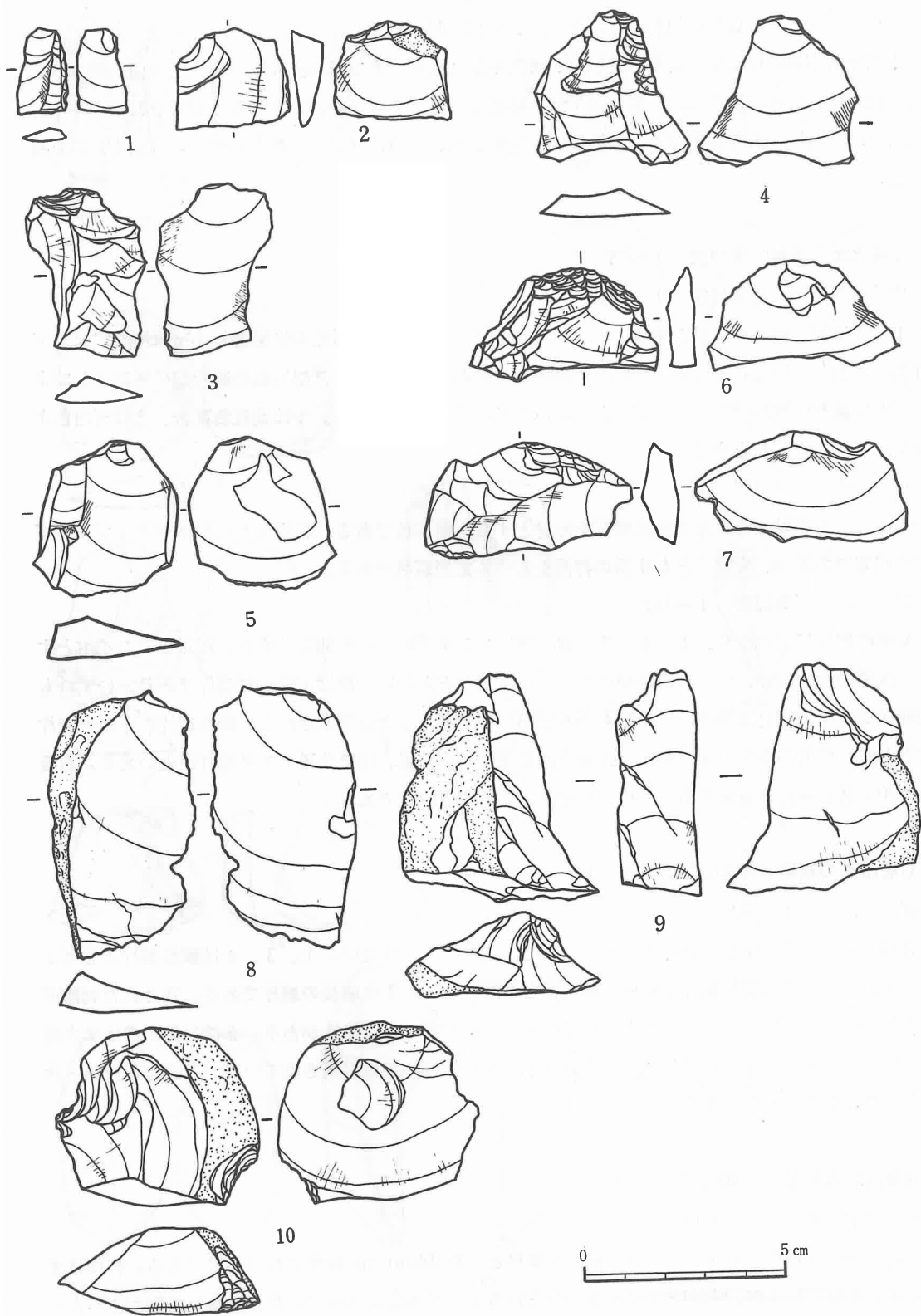
剥 片 (1～9)

VI層出土の遺物はすべて剥片であり、2次加工されたものはない。1、3、4は縦長剥片としてよく、4、5も母材は縦長剥片剥離目的の石核と推定される。7は横長の剥片である。残された剥離面の方向が一定していないところから母材は円盤状石核であった可能性がある。5は自然面を残す大型剥片で打面を欠く。末端部には調整 (**faceted**) された他の打面が残されている。石質は黄灰色・灰白色のホルンフェルスである。

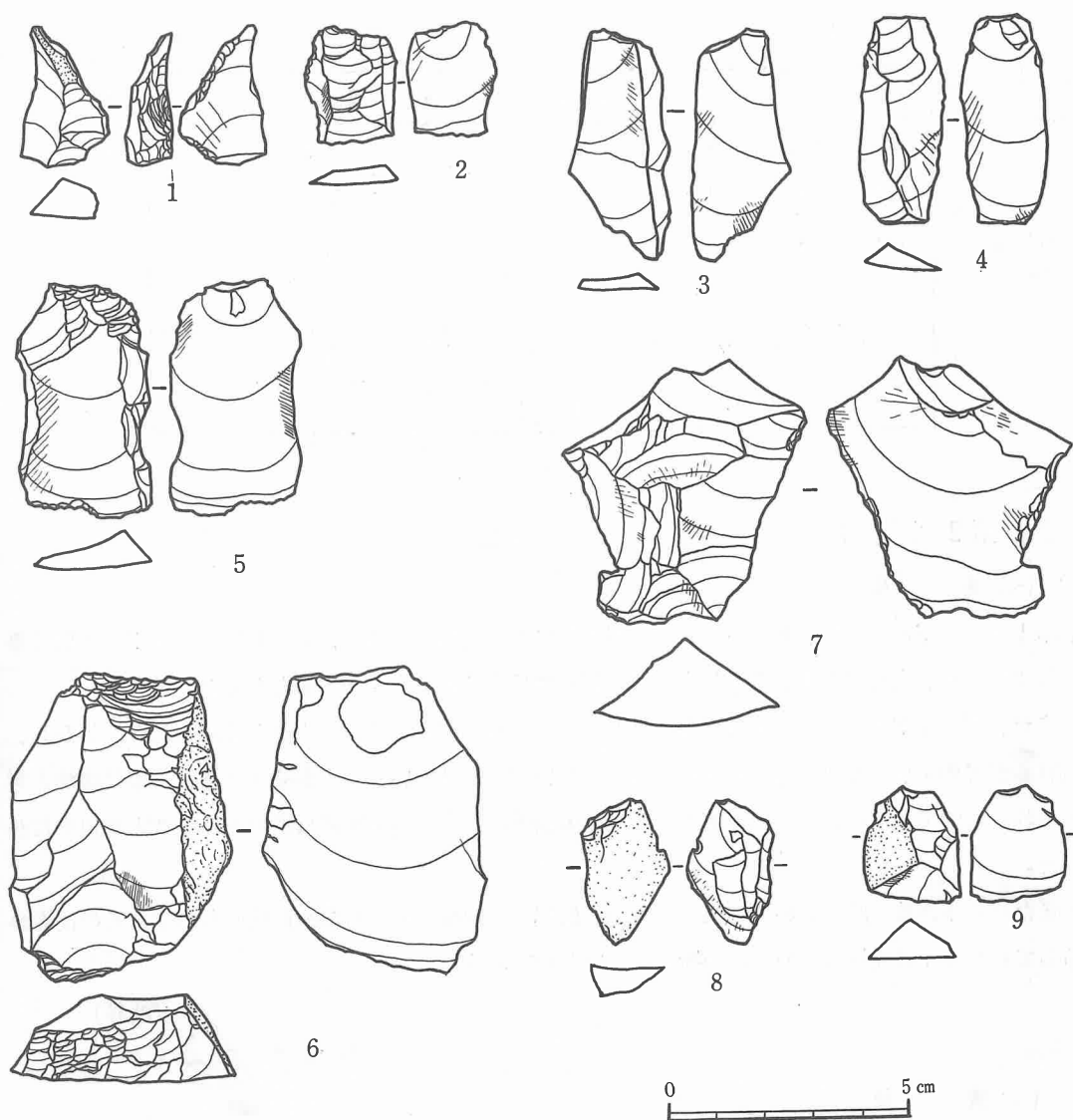
VII層出土の石器 (第14図 1～8)

ナイフ型石器(?) (第14図 1)

1は分厚い灰白色のホルンフェルス剥片を素材とした **blunting** 調整された石器である。打面はすでに除去されているが、**blunting** はV層にみられるような入念さはない。長さに比して幅があるところからもナイフ型石器とするには疑問がもたれる。



第13図 第1グリッド第Ⅵ層および第2グリッド第Ⅴ層(10)出土石器実測図



第14図 第1グリッド第Ⅶ層出土石器実測図

使用痕のある剝片 (第14図 7)

7は不定形な灰白色ホルンフェルス素材とした剝片で、主要剝離面側の両側辺に使用によるとみられる細かい剝離面が認められる。

ブレイド (第14図 2～6)

Ⅶ層においてはじめブレイドとされうるものの出土をみた。2～5は中型のブレイドで、いずれも小さい平坦打面をもつ。打面部には **faceted**、**prepared** いずれの調整も認められず、長さや幅の比も一定でない。6は分厚く幅広、大型のブレイドである。打面は上下に認められ、末端部に残されている打面が初期もので調整 (**faceted**) が著しい。(清水)

表 1

	V 層	VI 層	VII 層	
ナイフ形石器	2		1 (?)	
二次加工をもつ剥片	1			
使用痕をもつ剥片			1	
剥 片	21	9	2	
ブ レ イ ド			5	
石 核	1			

2. 第2グリッド (図版第六・八、第10・15図)

(一) 遺 構

第1グリッドと同様に、Ⅲ層下部からⅣ層上部にのみ遺物がみられた。遺物はグリッドの東側に集中しているが、山形押型文、厚手無文土器で石器類は全くみることが出来なかった。

また、グリッドのやや西側には径40cmほどの焼けた扁平礫と、3個の小礫が確認された。しかし、これらがどのような用途であったかは明らかでないが、焼けていることからすれば、一応は爐跡と考えられるものであろう。ところが第1グリッドの爐跡のごとく、周囲には遺物をみることが出来なかった。

またピットが数か所において確認されたが、規模は径20cm、深さも20cm前後のもので、その位置からしてもピットの性格については判断しにくいものである。

(渋谷)

(二) 遺 物

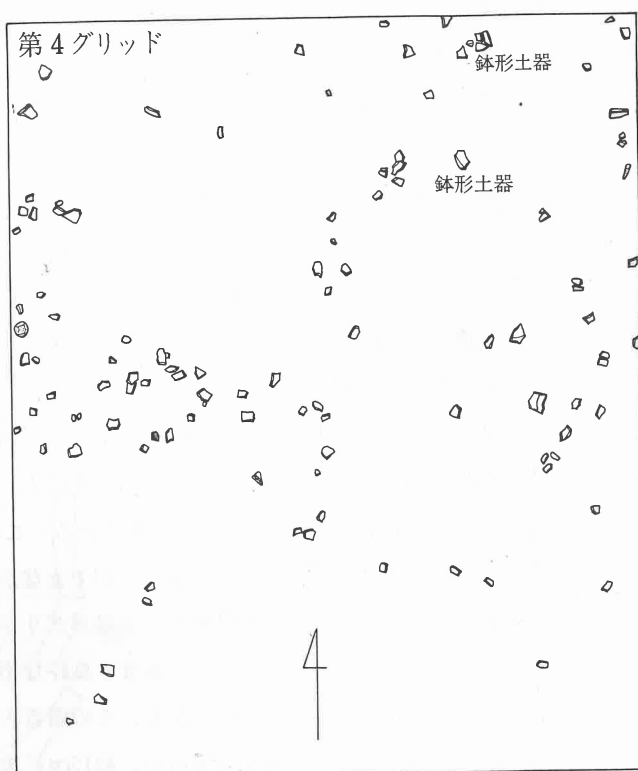
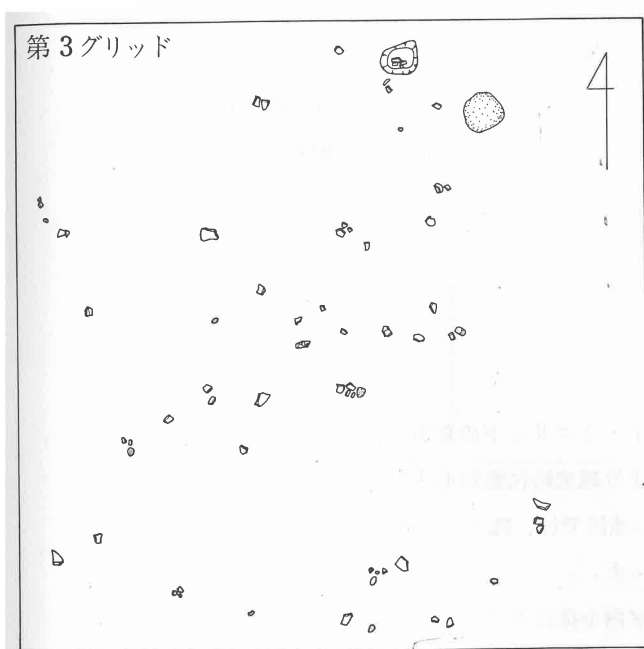
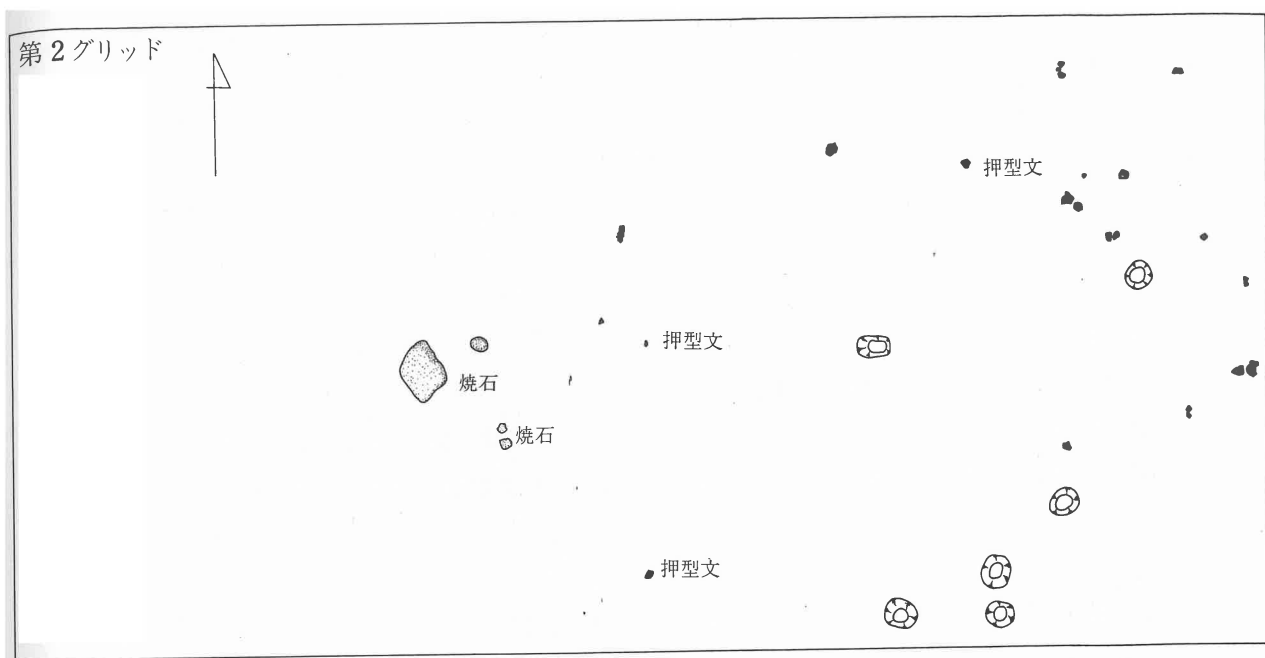
(イ) 土 器 (図版第八 第10図 5～8)

第2グリッドは、第1グリッドの冒頭で述べたように、第1グリッドの東に隣接するもので、出土遺物の時期、層位ともに、全く同じである。

この第2グリッドの遺物の出土状態は、東壁側中心に遺物が広がる。この広がり、第2グリッドの中央部でとぎれ、それより西側には、全く遺物は出土していない。しかし、その末端部には、焼石があり、第1グリッドの集石(爐址)との関連が考えられる。

また第2グリッドからは、ピットが数か所確認されたが、その性格は判断し難い。遺物は、山形押型文の細片3点(第10図 6、7、8)を除き、他は全て無文土器である。同層からは石器は全く出土していない。

押型文土器は、3点とも同一個体であるか否かは不明であるが、第1グリッドより比較的まとまって出土した押型文土器と、整った文様、施文の状態、胎土、焼成など共通している。文様はいずれ



第15図 第2・3・4グリッド遺物出土状態実測図

も、横走する山形押型文である。器形は、細片のため、不明である。無文土器（第10図5）は、比較的大きな破片を東壁中央部より出土することができ、一応、無文土器の器形を知ることができた。その器形は、口縁部が若干外反する尖底の土器と考えられる。器面には、調整する際生じたと思われる浅く鋭い条痕状の文様が、わずかながらみられる。器壁は、一定して厚く、胎土に砂粒を含む。焼成は、一様ではなく、全体的には赤褐色を呈するが、部分的には、黒褐色の焦げた色を呈している。

（坂本）

（ロ） 石 器

第2グリッドV層の石器（第12図10）

10は分厚い剝片の2ヶ所にノッチ加工をもつ石器である。打面は平坦であるが古い節理面を利用している。末端部は一方のノッチの部分より折損している。石質は黄灰色の火山岩である。

（清水）

3. 第3グリッド（図版第七・一〇・一一、第15～20図）

遺物は、Ⅱ層下部からⅢ層上部にかけて出土したが、全て縄文晩期に含まれる遺物である。土器はほぼ全体的に散乱しており、底部が4点確認されたが、特に集中するような状態ではない。石器はサヌカイト製の削器が出土したのみである。

また、グリッドの北側で径30cmほどの扁平礫がみられたが、第2グリッドのように焼けたものではなく、石皿として用いられたものであろう。その西側には径20cm、深さ10cmほどのピットが確認されたが、柱穴ではなく後世の掘り込みとされるものであった。

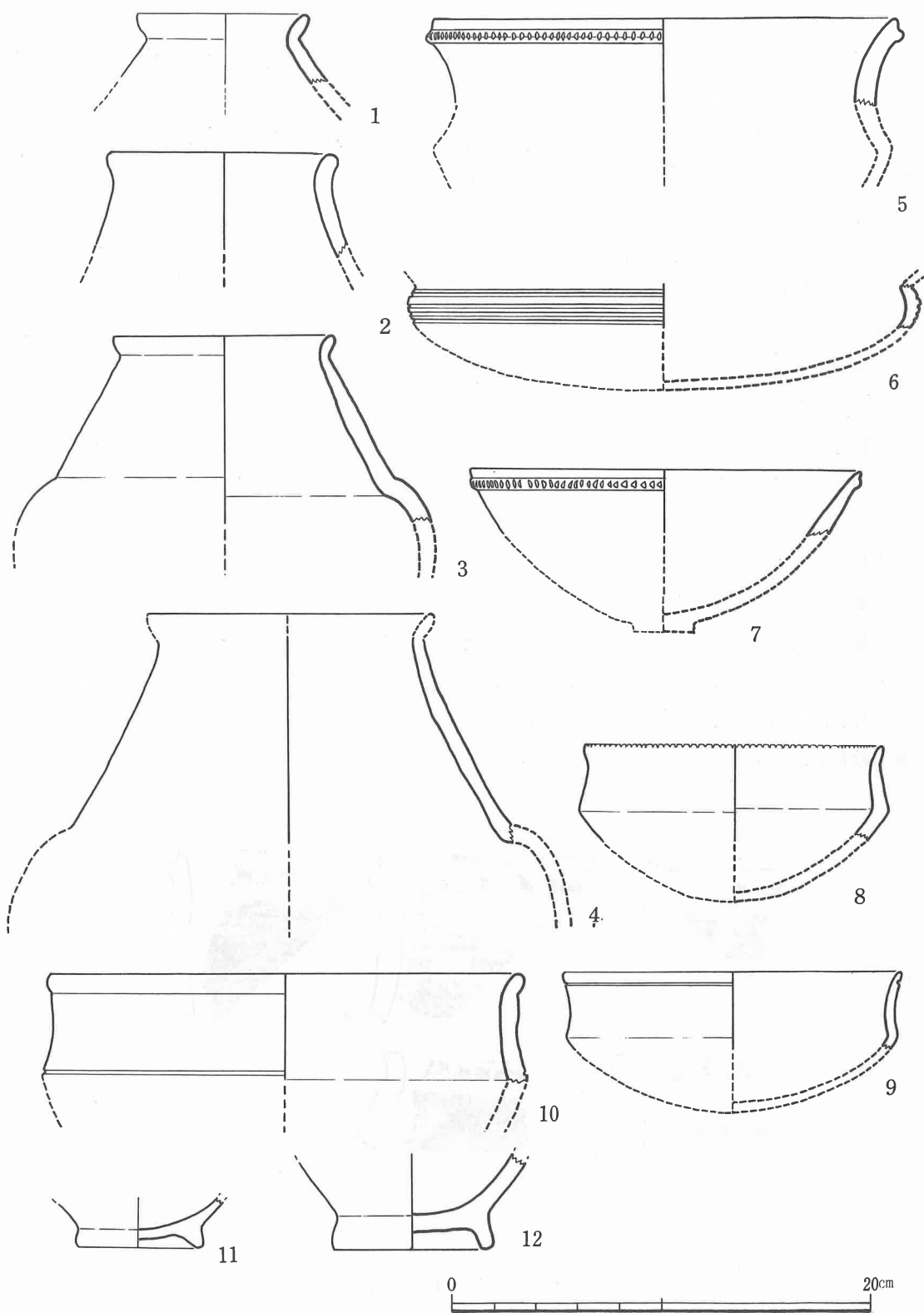
（渋谷）

（ハ） 遺 物

（イ） 土 器

第3グリッドと第4グリッドは隣接しており、第1・2グリッドの東方にある。この地区は、南にゆるやかに傾斜する斜面にあり、第Ⅱ層（黒色土）より縄文時代晩期の土器片が出土した。Ⅱ層は、第1グリッドの黒色火山灰層の上部にあたる。この地区では、縄文時代晩期の単純遺物しか出土せず、その他の時期の遺物は全く見ることができなかった。

第3グリッドの遺物の出土状態は、土器がグリッド内全体に平均的に広がっており、しかも密度はあまり高くない。土器片も小さく、あまり良好な状態ではない。ただ、東北隅より、人頭大の川原石、及びピットが検出された。しかし、この両者とも遺物との関連がつかめず、その性格は判断し難い。調査は層上部より5cm掘りで行い、約15cm前後の厚さをもって遺物が包含されていることが確認できたが、その時間差は全く認めることができず、同時期と考えられる。土器は、縄文時代晩期に普遍的にみられる。甕形土器、鉢形土器をはじめ碗状をなす浅鉢形土器、壺形土器の組合せで出土した。



第16図 第3・4グリッド出土土器実測図 (1)

甕形土器 （第17図14・15、第18図1・4）

甕形土器の口縁は、4点の出土をみた。いずれも口縁下に平行に、または、口縁部に接して刻み目のある突帯を持ち、肩部で段をつくる形態を呈する。器面は、全体を条痕文により調整したと思われるが、頸部は磨消されている。また、条痕文は内側にも全面、口縁に平行して施されている。器壁は一定しており、胎土、焼成とも良好である。

鉢形土器 （第16図8、第17図19）

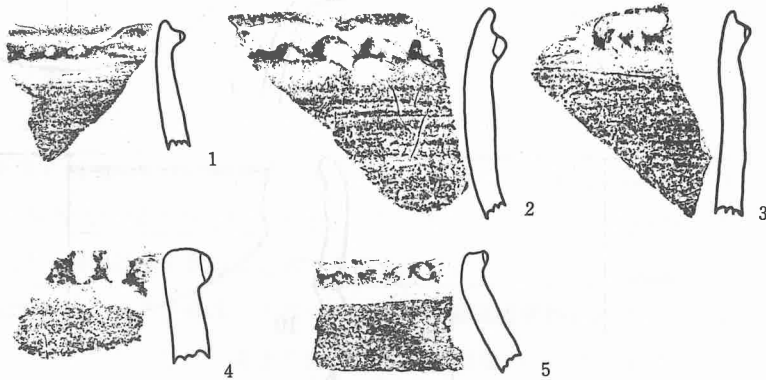
鉢形土器は2点出土したが、形態が異なる。19は、甕形土器を浅くした感じのものであり、口縁部には突帯が施されている。しかし、この突帯は、甕形土器の突帯とは異なり、上下から交互に押したとみられ、細い波状をなす。器面は、研磨されているが、焼成が悪いためか粗雑な感がする。胎土には、細かい砂粒を混入する。8の鉢形土器は、口縁部から直線的に底部へと続く形態と思われる。器面は、内外ともによく研磨されているが、焼成はあまりよくないが器壁は、0.5cm程度で薄く、胎土も良好である。

碗状をなす浅鉢形土器は、口唇部に刻み目をもち、ゆるやかに「く」の字状に外反し、肩部に一本の稜を生じている。器面は、条痕による調整ののち研磨仕上げした痕跡がうかがわれる。胎土・焼成ともに良好である。

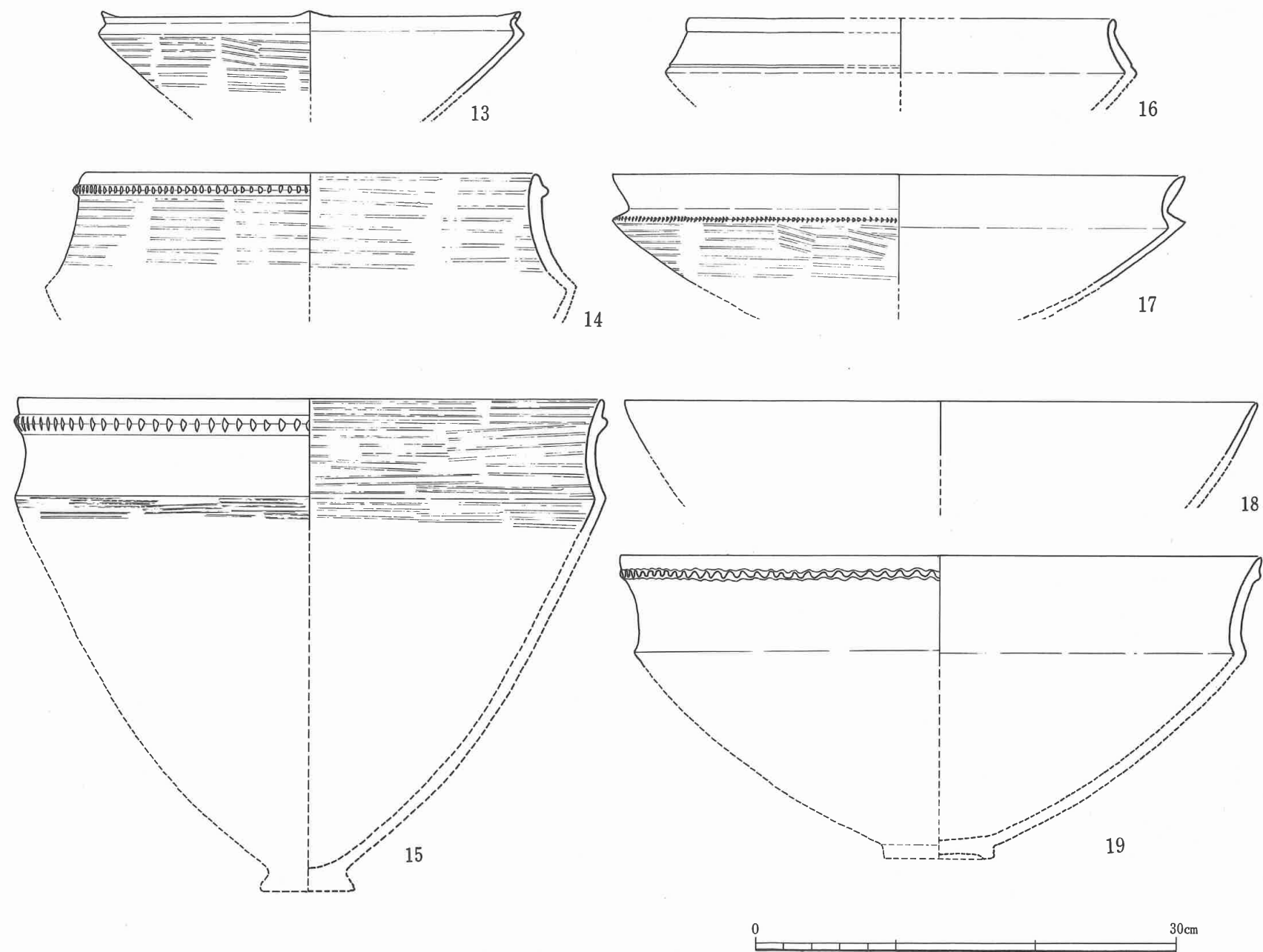
壺形土器 （第16図4）

壺形土器は1点のみ出土した。破片は頸部にあたり、今回の調査で出土した壺形土器の中で最も大きい。器面は外側を研磨し、その上から丹と思われる赤色の塗料を塗っている。しかし、内側は粗雑であり、器面調整を行った痕跡はみられない。器壁は薄く、0.7cmくらいで一定している。胎土には細かい砂粒を混入する。

（坂本）



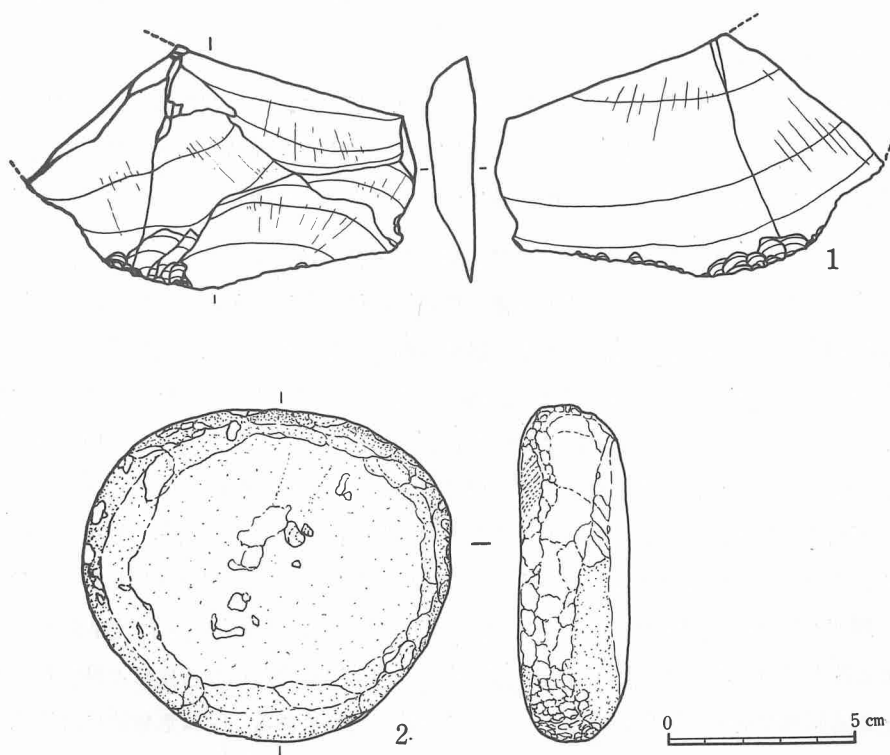
第18図 第3・4グリッド出土土器拓影（ $\frac{1}{2}$ 大）



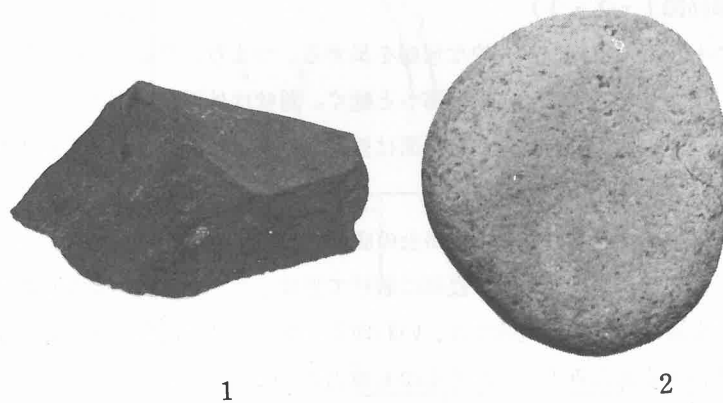
第3図 第二地点グリッド調査による遺物・遺構の出土状況

(ロ) 石 器 (第19・20図)

1はサヌカイトの横長の大型剥片を利用した削器である。エッジの中央部に集中して両面加工が施されており、それに連続して使用痕とみられる細かい剝離面が残されている。打面は意図的に除去されており、一部折損しているが全体はほぼ半月形に近いものであったと推定される。エッジの加工、使用痕と全体形からみて、縄文時代後晩期に特徴的な石包丁形石器と共通の用途を与えることができよう。(清水)



第19図 第3・4グリッド出土土器実測図(上削器・磨石)



第20図 第3・4グリッド出土石器

4. 第4グリッド (図版第七・一〇・一一、第15～20・22図)

(一) 遺物

Ⅱ) 土器

第4グリッドは、第3グリッドに隣接しているため、出土状態、遺物は全く同じ状況を示す。ただ、第4グリッドの南側が急な斜面を形成しているため、グリッド内の南側は遺物の出土が希薄である。土器は、第3グリッドに比較して、多量に出土し、その器形も豊富である。それは、第3グリッドと同様、甕形土器、深鉢型土器、浅鉢形土器、碗状の浅鉢形土器、壺形土器などがあげられる。

甕形土器 (第16図5、第18図2・3・5)

甕形土器は口縁部が4点出土したが、第3グリッドと同様、口縁部に刻み目のある突帯をもつ。また、器面は条痕によりを施すこと調整され、胎土に細い砂粒を混入する。第4グリッドより出土した甕形土器は、細片であるため全体の器形を明確につかむことは困難である。

鉢形土器 (第16図6・7・9・10、第17図13・16・17・18)

深鉢形土器は、1点のみ出土した。器形は縄文後晩期の伝統を引くものと考えられ、口縁部と肩部に1本の沈線が入る。器面は、内外面ともよく研磨されており、黒色を呈している。

浅鉢形土器は、器形が豊かである。17は口縁部が「く」の字状にくびれ、肩部には鋭い施文具による刻み目が施されている。また、胴部には条痕文が横位に施されている。しかし、内面は入念に研磨されている。胎土には細かい砂粒を混入する。13は口縁部に4ヶ所突起をもつ浅鉢形土器と思われる。これも胴部に条痕文があるが、その上から研磨し、器面調整を行なったことがうかがわれる。また器面には赤色顔料を塗った痕跡が認められる。16は内外面ともよく研磨された黒色を呈する土器片である。肩部は急角度で折曲する。6は細片ではあるが、肩部に4本の平行沈線文が施されており、他の土器片とは趣を異にする。7は口縁部から底部へと直線的にのびる器形と思われるが、口縁下に甕形土器と同様な刻み目突帯がみられる小型の浅鉢形土器である。9は形態的には浅鉢形土器と思われるが、器壁は薄く、器面には赤色顔料が塗られており、碗的な要素をもつ土器と考える。

以上が浅鉢形土器であるが、その他、3個体の壺形土器の出土があげられる。

壺形土器 (第16図1・2・3)

壺形土器はいずれも小型であり、画一的な形態を呈する。つまり、口縁部は外反し、直線的に頸部が続き、肩部で一段高まりをもちふくらむ胴部へと続く。器壁は外面は研磨され、その上から赤色顔料が塗られ、入念に仕上げられているが、内面は器面調整された痕跡が認められず粗雑なままである。

第4グリッド出土の底部は、第3グリッド出土の底部と同様、全て揚げ底を呈する(11・12)。特に12は帯状の粘土を環状にし、そのまま底部に着けて形成したと思われ、かなりの高さがある。第3地区、第4地区を通じ、下黒野遺跡では、いわゆる円盤貼付けの底部は一点も得ることはできなかった。また壺形土器の底部とみとめられるものも検出できなかった。

(坂本)

(ウ) 石 器 (19図 2)

晩期の土器に伴って磨石 1 点が出土している。2 は扁平な緻密 火山岩礫 を利用した両面磨石である。周縁は敲石として使用され敲打痕が著しい。磨面は他の面より一方の面が平滑であり、石皿とセットをなしたものであろう。(清水)

5. 第 5・6 グリッド (図版第一一、第21図)

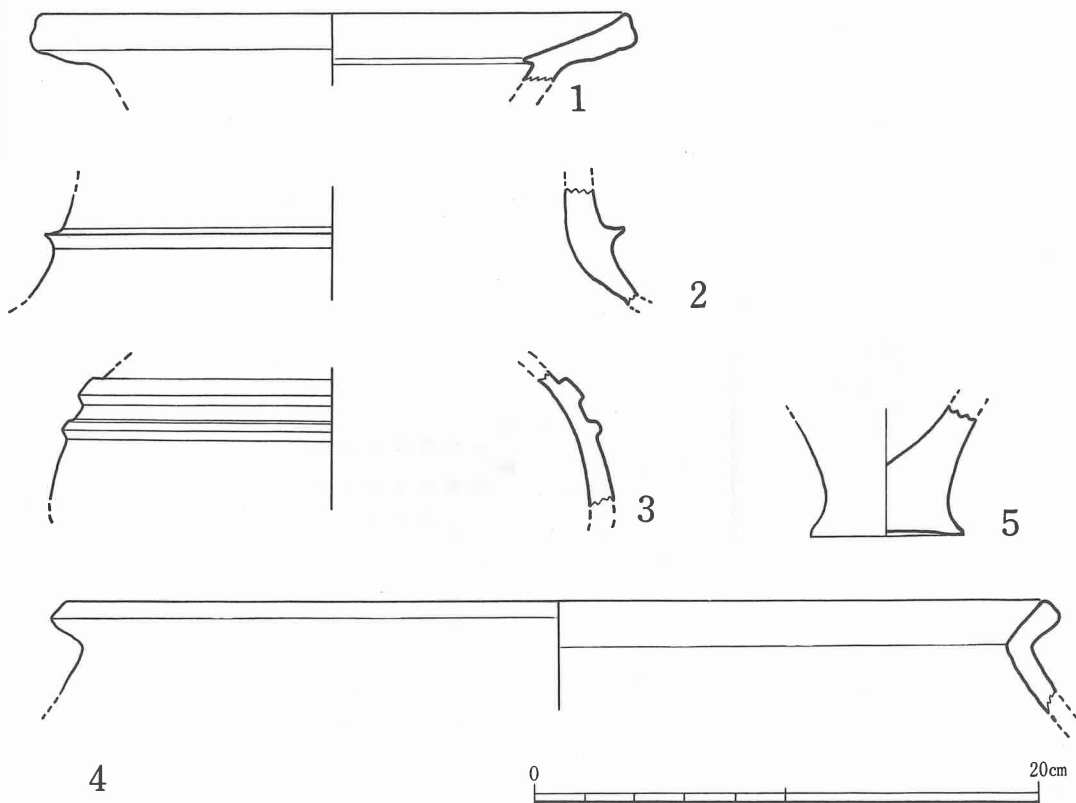
第 5 グリッドは、予備調査によって弥生式土器の確認されていた地域であるが、第 1 グリッド周辺に比較すると黒色火山灰層の堆積が厚くなっている。遺物は、Ⅱ層中位から出土したが少なく、弥生時代中期に属するものである。また、石器類は検出されなかった。

第 6 グリッドは、2～3 点の晩期と思われる土器片が検出されたが、特記するものはみられなかった。(渋谷)

(イ) 遺 物

(イ) 土 器 (第21図)

第 5 グリッドより出土した遺物はⅡ層中位の弥生時代の土器である。時期的には差があると思われるが、調査時では平面的にしかとらえることができなかった。器種は甕形土器、壺形土器がある。



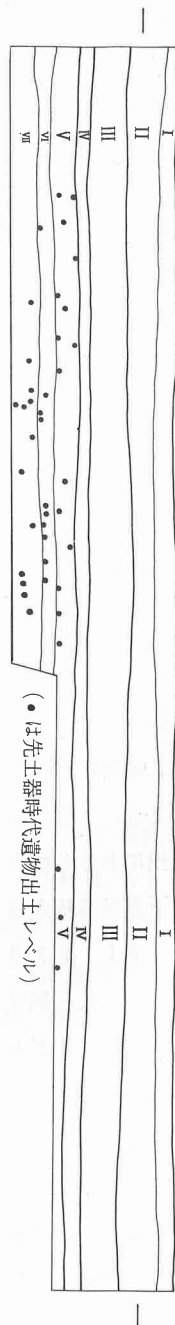
第21図 第 5 グリッド出土土器実測図

2は壺形土器の頸部であり、一本の突帯文が施されている。3は胴部の破片であり2本の平行突帯文が施されている。1は口縁部が「L」字形に折曲する壺形土器と考えられる。4は口縁部が先端で厚みをもち外反する。この土器は甕形土器と考えられる。

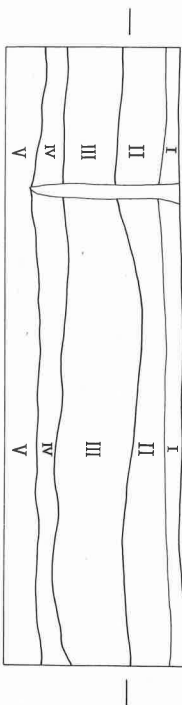
以上、第5グリッドより出土した弥生時代の遺物は時期的には中期と後期が考えられる。しかし遺物の出土状態はきわめて疎であり、弥生時代遺跡として特筆すべきものはみあたらない。

(坂本)

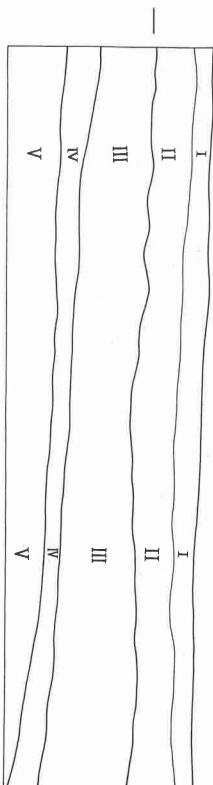
第1グリット(南側)



第4グリット(北側)



第4グリット(東側)



- 土層
- I 表
 - II 黒色土層(火山灰層)
 - III 黒褐色土層
 - IV 暗褐色土層(ローム層)
 - V 黄褐色粘質土層(ローム層)
 - VI 黄褐色粘質土層(ローム層)
 - VII 黄茶褐色粘質土層(ローム層)

第22図 第1・4グリット土層実測図

Ⅲ ま と め

(1)

下黒野遺跡の発掘調査において、特に注目されるのは、早期押型・無文土器に伴う集石と炉跡、さらに晩期終末期に比定される夜臼式系統土器の検出である。

縄文時代早期の集石は、従来の先学諸氏の研究によって、それが当時の生活に密着するものであることが判明しつつあるが、それを積極的に裏付けるデーターの提出はきわめて稀である。したがって今回の調査では、その集石の分布のあり方や、伴出土器の出土状態などについて、綿密な平面的観察を試みた。

その結果、第1グリッドで一部の集石が積み上げられた状態にあり、その部分を取り除いたところその下部で扁平礫を中心にして、花卉状に長円礫が取り囲んだ遺構が検出されたのである。

このような遺構を県下に求めるならば、川原田V層で検出された炉跡をあげることができよう。川原田遺跡の炉跡は、中心を囲んだ長円礫の傾斜が急で、75cmの高さを有するものであるが、その中には他の小石を入れて焼いた形跡が確認されている。今回の調査で発見された小礫群の積み上げた状態も、他で焼いた小礫を花卉状の炉床に積み上げて蒸焼を行ったものと理解されよう。また時期的にも、その周囲で確認された山形押型文と、川原田V層出土の大形楕円文の時期には、大きな時間的な差はみられないものである。

したがって今回発見の炉跡は、その機能を考えるうえで川原田V層出土の炉跡よりさらに一層明確な形態を示すものであり、縄文早期における炉跡の一形式として注意されるものであろう。

夜臼式土器の発見は、後述するように県下でも神宿、ネギノ、円生川遺跡などに出土例があるが、九州における晩期Ⅲ式の細分が、多くの問題を残しているだけに、一応セットとして検出されたことは注目されよう。また、東九州においても、このようにセットとして把握された例は少なく、今回の資料は東九州における晩期Ⅲ式の標式となろう。

最後に、下黒野遺跡全体の時代的変遷について触れてみよう。

第一地区（第1・2グリッド）は、遺跡の西側にあり、縄文早期・先土器時代の遺物、遺構が確認されたが、他の時代に属するものは全く検出されなかった。

第二地区（第3・4グリッド）は、Ⅱ層で若干の弥生式土器が検出されたが、主体をなすものは縄文晩期の遺物である。

第三地区（第5グリッド）では、弥生時代中・後期の遺物が発見されたが、その量は少なかった。

以上のように、下黒野遺跡の調査では、先土器時代から弥生時代にいたる遺構または遺物が確認されたが、ほとんどその地区には複合する遺物や遺構はなく、遺跡は西側から東に向かって年代的な推移をみることができるのである。

（渋谷）

（註）1 岩尾松美、酒匂義明「速見郡山香町大字広瀬川原田洞穴の調査」 大分県地方史 第34号

2 大分県教育委員会「丹生川遺跡の調査」 大分県文化財調査報告書 第十集 1964

イ) 先土器時代の遺物

先土器時代の石器は第1グリッドに集中して出土をみた。層位はV、VI、VII層の3層に遺物の包含がみられたが広がりほとんど変化がなく、第1グリッド東南部に濃い分布を示した。

遺物の総数も多くはなく、またその中で占める石器の比率も高くはない。つまり剥片とブレイドが主体を占めており、層位毎の石器組成というものの考察が不可能であった。しかし石器素材としての剥片、ブレイドの形態、および母材としての石核からの剥離技術というものについてある程度考察できたことは成果といえよう。

V層の遺物については、ナイフ形石器が2点出土している。その素材である縦長剥片は剥片全体の中でも半数を占めている。さらに他の不定形な剥片にしても残された打面はいずれも小さく、剥片剥離が意図的であったことが推定される。ナイフ形石器は全体の形、基部調整、打面を除去し先端部となす等九州型ナイフ形石器の典型としてよく、時期もそれに対応できるであろう。

VI層では剥片のみに限られる。V層と同様に縦長剥片が存在し、それとともに円盤形石核から剥離されたと思われる横長の剥片、および調整を一方にもつ両端打面の石核から剥離された剥片が認められた。このことから剥片剥離の形態は統一されたものでなく、バリエーションに富んでいたといえるであろう。

VII層では、不定形なナイフ形石器が1点と使用痕を有する不定形剥片のほかは中型のブレイドが目立つ。長さとの幅の比に一定がなく真正のブレイドとするには一沫の不安があるが、V層、VI層の縦長剥片に比べると大きな相違が認められる。またVI層と同様に一方に調整打面をもつ両端打面の石核の存在が推定されるが、これもVI層に比べると打面の調整も入念であり、全体も石刃核(blade core)にきわめて近い母材といえる。

各層にみられた両端打面の存在は、佐賀県鈴桶遺跡、大分県東台遺跡の技法との共通性が指摘されるようであるが、本遺跡では石核そのものの出土が乏しく、剥片の形態からの比較は、若干の危険を伴う。しかしながらVII層からV層という時間的過程において、ブレイド→縦長剥片+不定形剥片という流れがつかめそうな様相をうかがう。これは九州の先土器時代の中で剥片剥離技術の変遷、いかえれば石核と剥片の形態的变化という大きな課題にふれることになるが、資料の絶対数の乏しさはいかんともしがたい。

石材について考察すれば、本遺跡においては東台遺跡で主体を占めた灰黒色のガラス質に近いきわめて緻密な無斑晶流紋岩は全くみられず、介在物を多く含む漆黒色黒曜石とガラス質角閃安山岩各1点の外は、灰白色ないし黄灰色を呈すホルンフェルスが主材となっている。この中には頁岩としうるものも存在するが明確に同定できない。黒曜石は鹿児島県上場台地に産出するものに類似する。ガラス質角閃安山岩は⁽⁵⁾姫島に産するとみられる。ホルンフェルスは大野川中流域川原に広範囲に転礫として産出が推定されるが、この点については未調査の分が大きい。

(清水)

(註) (1) 杉原莊介他「九州における特殊な刃器器技法—佐賀県伊万里市鈴桶遺跡の石器群」

考古学雑誌 51—3 1966

(2) 清水宗昭「先土器時代の遺物」『東台遺跡』 臼杵市教育委員会 1974

(3) (2)に同じ

(4) 池水寛治「鹿児島県出水市上場遺跡」 考古学集刊 3—4 1967

(5) 姫島の西部ダルマ山周辺において、同質の礫が採集されているが、岩石学的な検討は行われていない。
(清水)

ロ) 縄文早期の遺物

縄文早期の遺物の分布は、第1グリッドで検出された炉跡(集石と炉床)の周囲に集中することが指摘でき、炉跡をはなれるにしたがい遺物の分布は稀薄となる。第2グリッドにおいてはグリッドの東側に散布する。

第1・2グリッドで出土した押型文土器は、早期に普遍的にみられる楕円文や格子文を伴わず、山形文のみによって構成されている。一方無文土器は全て厚手のものであり、田村遺跡、⁽¹⁾ 稲荷山遺跡、⁽²⁾ 臼杵市東台遺跡等⁽³⁾でみられた薄手の土器は全く検出できなかった。無文土器は東台遺跡でみられた圧倒的な量に及ばないが早期出土土器の約80%を占めその使用度は高い。

またこの押型文に共伴して剥片が数点出土したのみで早期に普遍的な石鏃、あるいは東台遺跡⁽⁴⁾において顕著な不定形な剥片石器の存在は皆無であった。しかし出土の剥片は石質からみて、下部の先土器包含層からの混入ということも考えられる。そうすれば、炉を中心として営まれた押型文の時期には全く石器を伴っていないこともいえない。

下黒野遺跡における押型文文化は、層位、遺物の炉跡との関係からきわめて限られた時期にしばらくことができよう。すなわち土器の型式・形態の面から、⁽¹⁾山形押型文が整然と横走しており、押型の単位もほぼ統一されている。⁽²⁾土器の大きさもまた大型化しない中型のもの、⁽³⁾口辺部の整形に原体⁽⁵⁾刻文がみられる等により、早水台Ⅱの時期に相当するといえるであろう。

(清水、坂本)

(註) (1) 賀川光夫、羽田野一郎「大分県大野郡田村遺跡調査報告」大分県朝地町教育委員会 1959

(2) 賀川光夫編「稲荷山遺跡緊急発掘調査」 大分県文化財調査報告第20・21輯 1970

(3) 坂本嘉弘「縄文早期の遺物—土器」 『東台遺跡』 臼杵市教育委員会 1974

(4) 橋爪啓史「縄文早期の遺物—石器」 『東台遺跡』 臼杵市教育委員会 1974

(5) 縄文早期の編年については、賀川光夫『大分県の考古学』(吉川弘文館 1971)にこれまで研究の集成がなされている。

ハ) 縄文晩期の遺物

第3・4グリッドで出土した縄文晩期の土器群は、グリッド別に分けるものでなく同一組合わせとして把えるべき性格のものである。遺物に大型破片が少なく小破片として広範囲に広がっているのは、一次的な状況がかなり変化していることを示す。また土器に比して石器の数が少なく、わずかに打製石庖丁としての機能が考えられる大型の削器と敲石兼用の磨石の2点をみるだけである。縄文晩期Ⅲ式⁽¹⁾のこの時期においても、まだ相当量の扁平打製石斧⁽²⁾が共伴するのが普遍的であるが本遺跡においては確認することができなかった。

土器はまとまった出土をしていないが、各器形は一応セットとして出そろっており、縄文晩期終末期の土器組成を把握できたことは今回の調査の最も大きな成果といえるであろう。下黒野遺跡の縄文晩期土器は晩期終末、弥生時代板付Ⅰ式の直前に位置づけられるもので、北九州の夜臼式⁽³⁾に比定されるものであり、その前段階に位置づけられる西九州の山の寺式⁽⁴⁾との対比も考えられる。さらに南四国地方における入田B式⁽⁵⁾、瀬戸内地方の黒土BⅡ式⁽⁶⁾とも時期的に平行するものと考えられる。

甕形土器は神宿、ネギノ出土のカメ棺と比較される大型土器は出土をみていないが、口縁部の突帯⁽⁷⁾文および器面の顕著な条痕仕上げ等の共通要素をもつ。肩部のくの字の屈曲は虚空蔵寺跡出土にくらべて明瞭な稜を形成する。

鉢形土器については、甕形土器と共通する突帯を有する粗製土器と精製土器、さらに浅鉢・深鉢の大別が可能である。しかし晩期Ⅰ・Ⅱ式にみられる、粗製＝深鉢、精製＝浅鉢という図式はくずれ、黒色磨研の浅鉢の比率は著しい低下を示す。浅鉢には表面に条痕仕上げを施したものがあらわれ、さらに肩部に直接刻み目を付けたものまで出現する。甕形、鉢形土器の底部については、いわゆる円板貼付底はなく揚げ底のみしか見い出すことができなかった。円板貼付底は概して大型の甕型土器に付くものと考えられるが、円板貼付底がみあたらないことが地域的な特殊性として抽出することができるかどうか今後の問題として残される。

壺形土器は丹塗磨研の著しい精製品であり、弥生前期の板付Ⅰ式に酷似する。県下における出土例は丹生川に1点を見るだけであるが器面仕上げについては著しい相違がある。本遺跡のものはむしろ弥生時代内田遺跡出土の板付Ⅰ式土器⁽⁸⁾に共通する要素が多い。

九州における晩期Ⅲ式の細分についてはまだいくつかの問題が残されている。乙益重隆氏は山ノ寺式に続くと思われる原山式を一応広義の夜臼式の範囲にとらえ独立して設定することに疑問を残しているが、古田正隆氏は山ノ寺式と夜臼式との間に原山式を明確に設定している。古田氏はこの設定に、原山式文化一高地占拠、夜臼式文化一低平地占拠という水田耕作がカギをにぎる地形的占拠状況に論拠を置き、文化層の分離に重点は置いていない。

さらに古田氏は礫石原遺跡出土の滋賀里式土器⁽⁹⁾をもって瀬戸内方面からの影響のあることを考察されている。この点についても今後東九州地方は近畿、瀬戸内地方と九州との接点として重要な役割をもつであろう。

居住地としての立地を考えるならば、下黒野遺跡は由布岳の東南麓にあたり、由布川泥流の末端、

大分川沖積平野との接点に位置する。島原半島においては火山麓170～250mの標高に晩期遺跡が集中しており、また大野川流域の阿蘇火山東麓においても、火山性台地および河岸段丘上に多くの晩期遺跡が立地する。これにくらべ沿岸部遺跡の様相は貧弱ともいえるが、本遺跡が内陸部と沿岸部と中間的位置づけにあることは晩期集落の立地を考えるうえからも興味のあることである。

前述したように、本遺跡では石器がほとんど検出されず晩期終末における農耕の問題にふれることができなかった点が惜しまれる。しかしながら、晩期終末期の土器様式を組合せの上から把握できたことは、今後の東九州地方における標式とするに足りるものであり、今回の調査における顕著な成果であったといえるであろう。(清水)

(註) (1) 賀川光夫(「縄文晩期文化(九州)」新版考古学講座 3 1973)の晩期Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式の分類による。

(2) 島原半島においては、晩期Ⅲ式の山ノ寺、原山の時期に多量の扁平打製石斧が出土している。

(3) 森貞次郎「福岡県夜臼遺跡」日本農耕文化の生成 1961

(4) 春成秀爾(「縄文晩期文化(中国・四国)」新版考古学講座 3 1969)の編年による。

(5) “

(6) 賀川光夫「九州における晩期のカメ棺」石器時代研究 第3号 1958

(7) 賀川光夫「縄文のカメ棺(Ⅰ)」考古学ジャーナル 34 1969

(8) 後藤宗俊「夜臼式土器」法鏡寺・虚空蔵寺跡 大分県文化財調査報告 第26輯 1973

(9) 賀川光夫「縄文式土器」丹生川遺跡の調査 大分県文化財調査報告 第10輯 1954

(10) 賀川光夫「弥生文化」大分県の考古学 1971

(11) 乙益重隆「縄文文化の発展と地域性—九州西北部」日本の考古学Ⅱ 1965

(12) 古田正隆「山ノ寺槌木遺跡」百人委員会埋蔵文化財報告 第1集 1973

(13) 古田正隆 前出

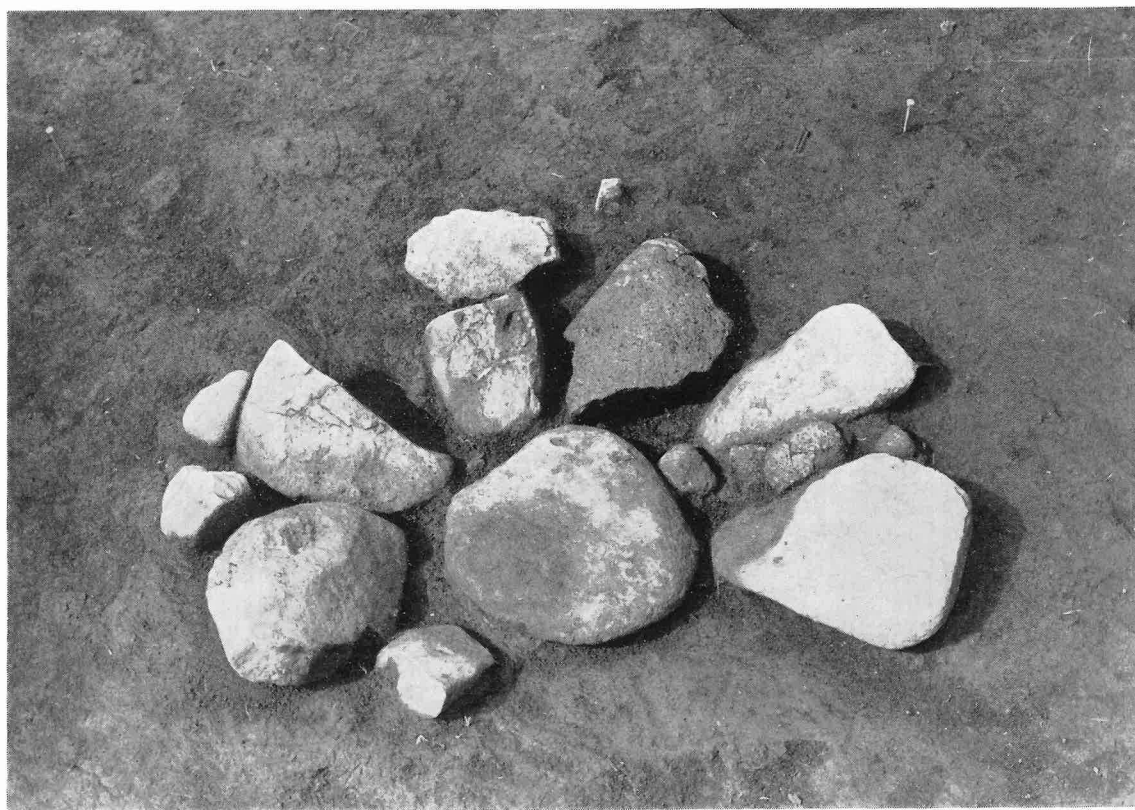
(14) 鏡山 猛「島原市礫石原遺跡」九州考古学 14 1962

(15) 古田正隆 前出

(16) 九州における縄文後晩期の農耕問題研究については賀川光夫氏の著しい業績がある。

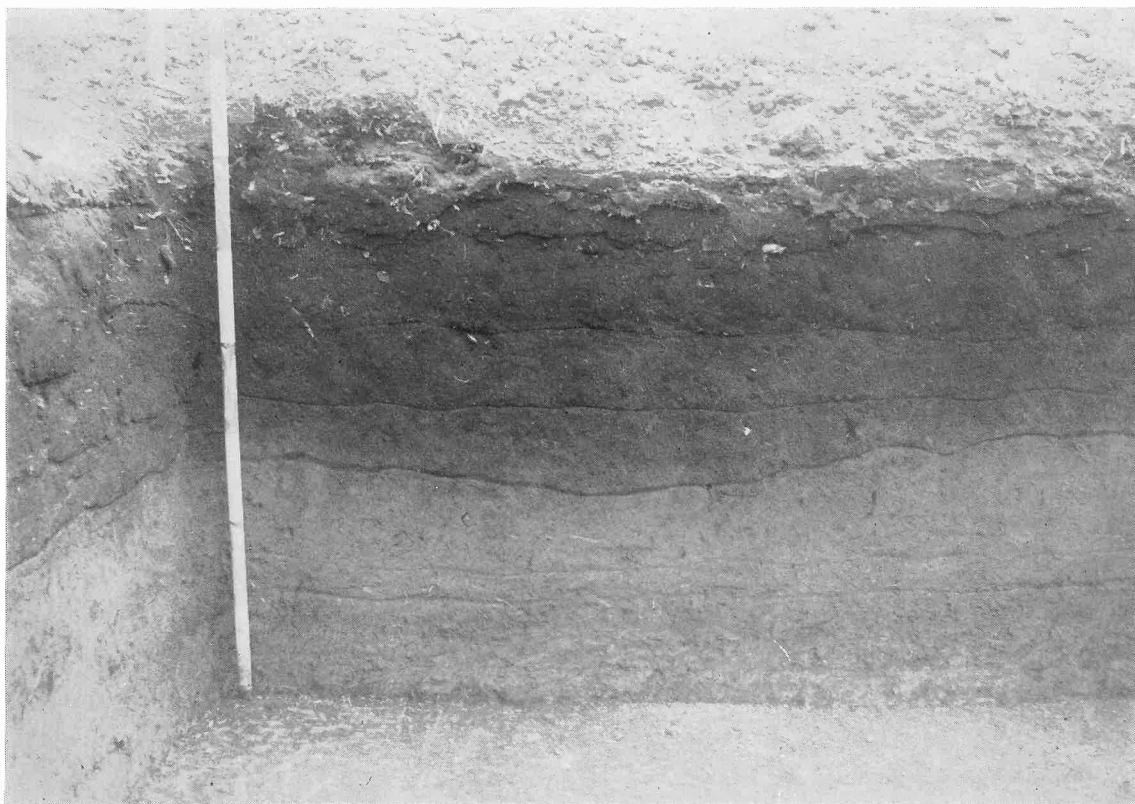


(東側より)

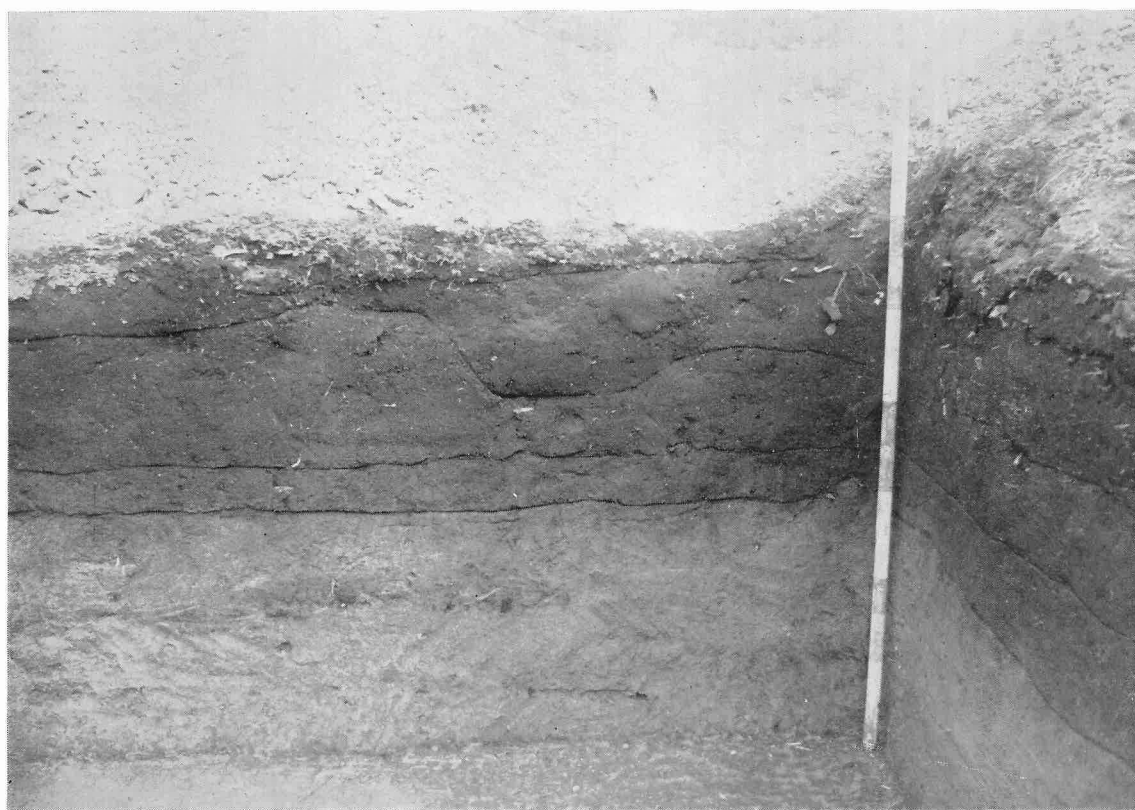


(東南より)

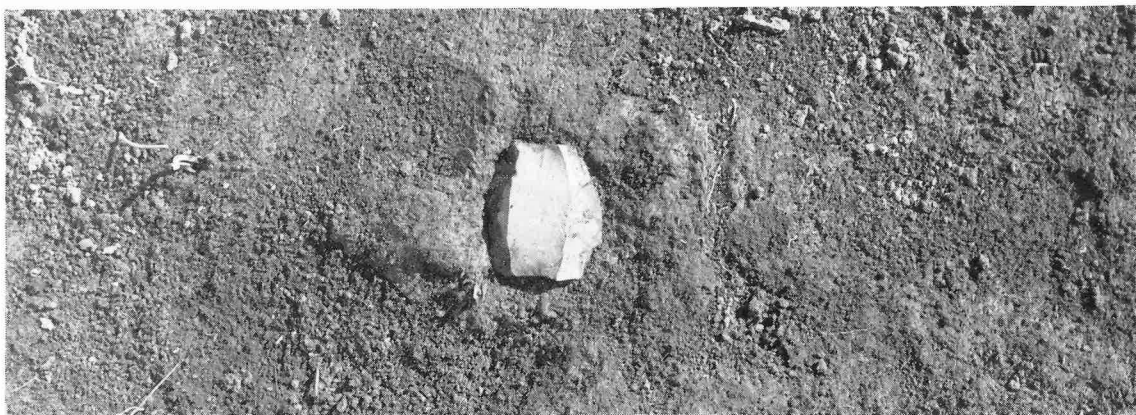
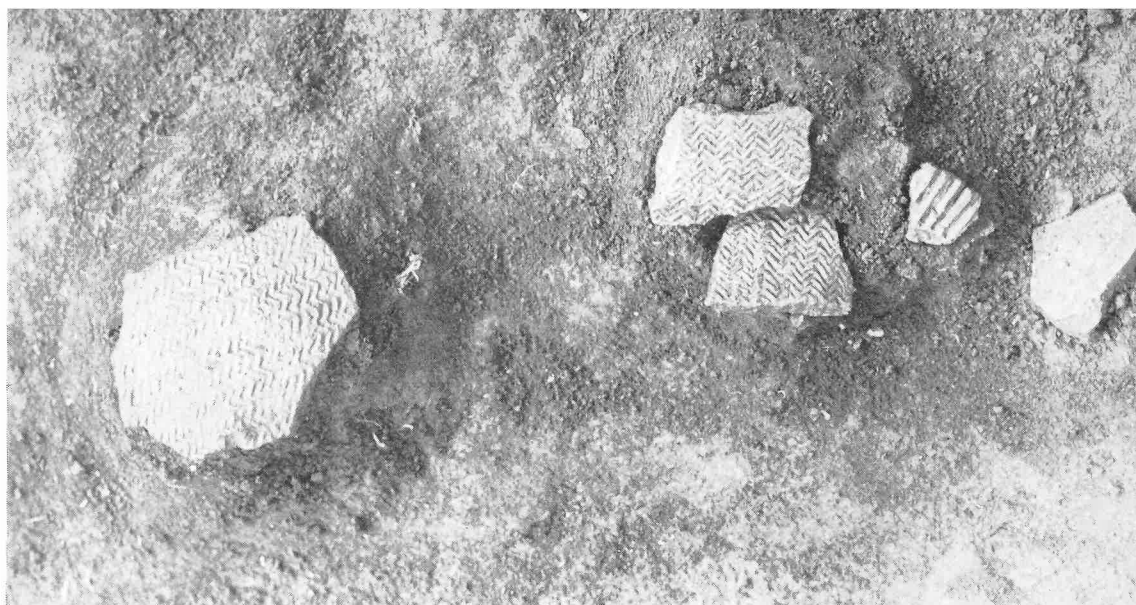
図版第四
第1グリッド
土層



(北側より)



(西側より)

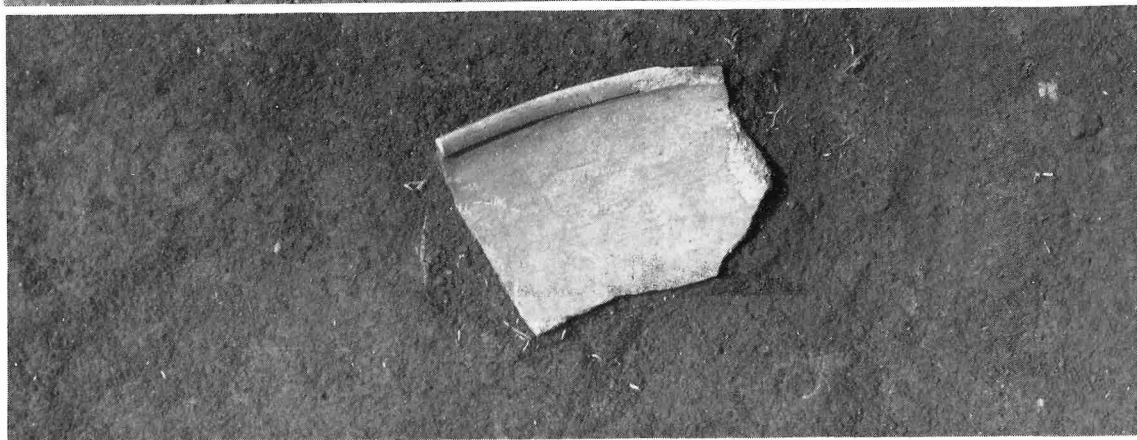
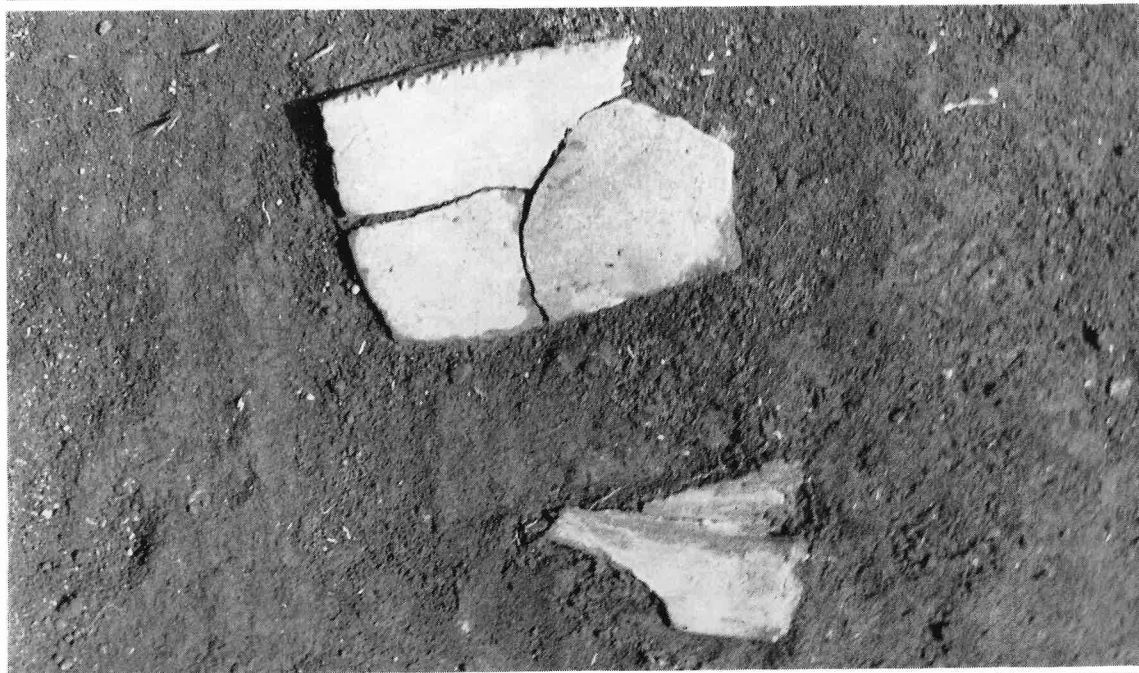


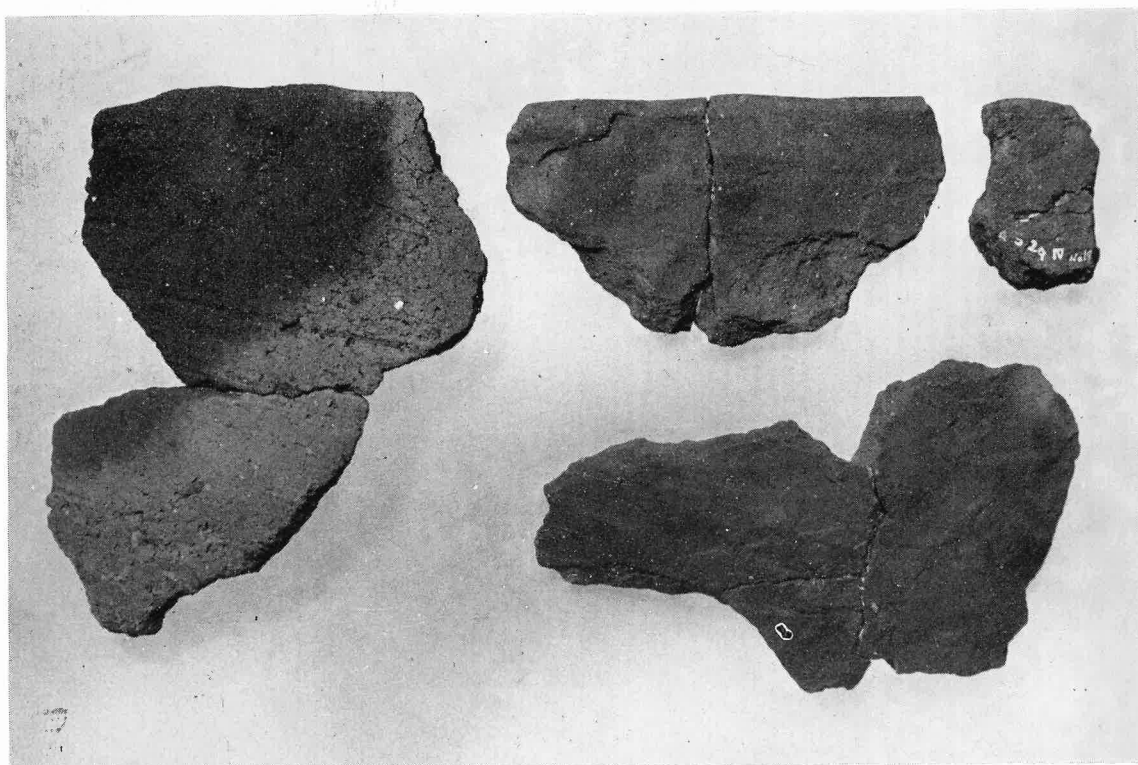
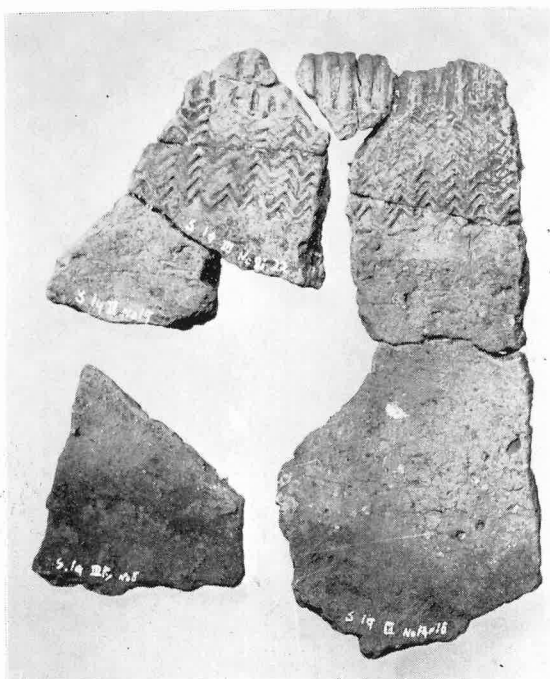
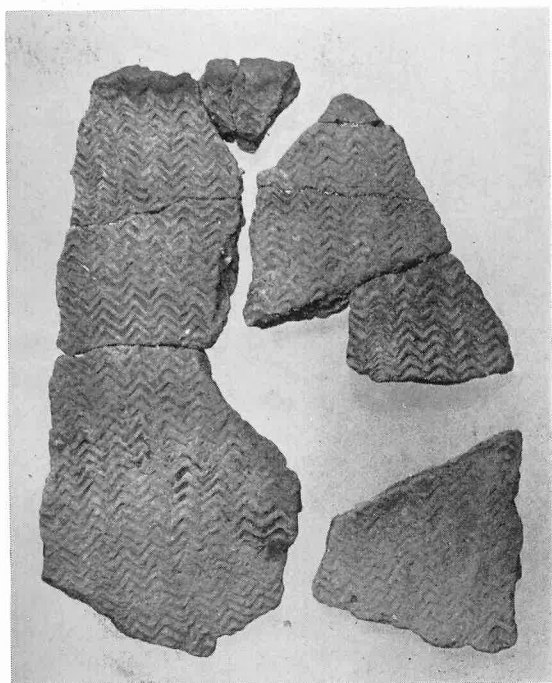


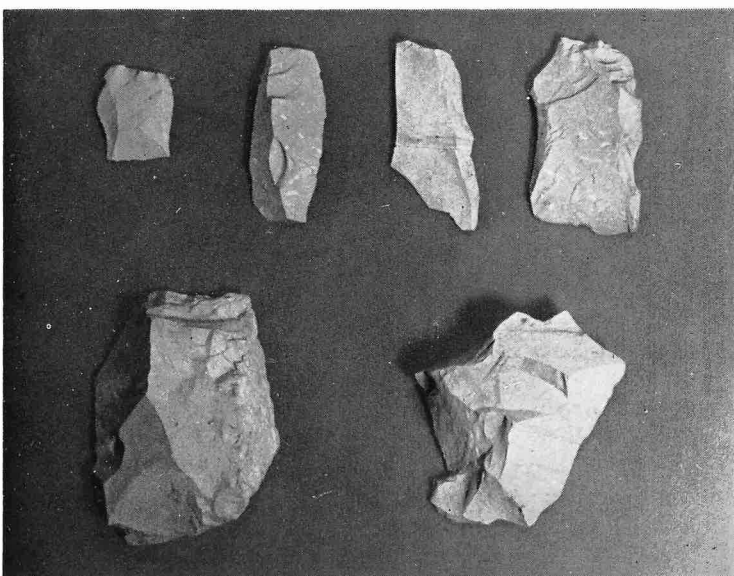
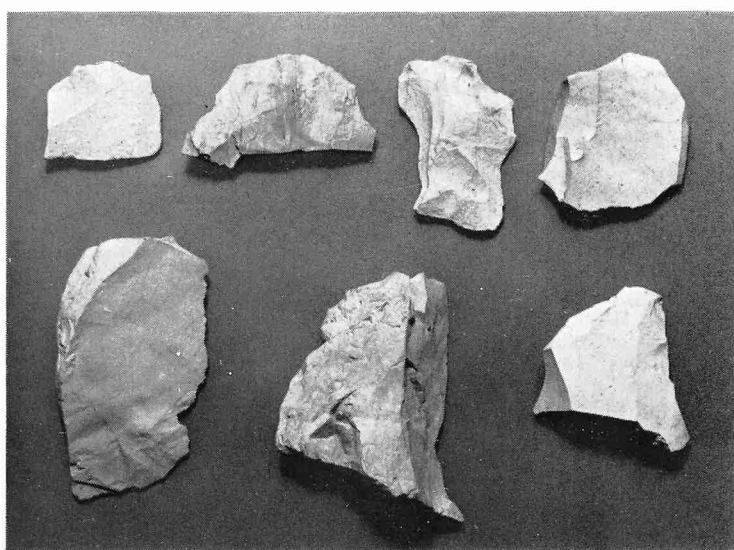
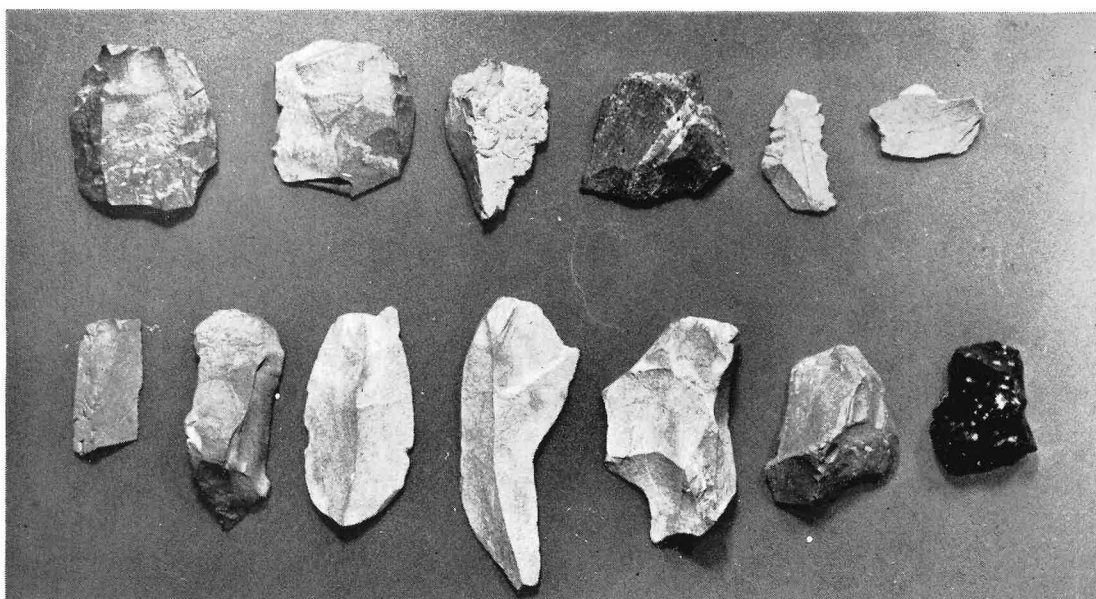
(西側より)



(北側より)





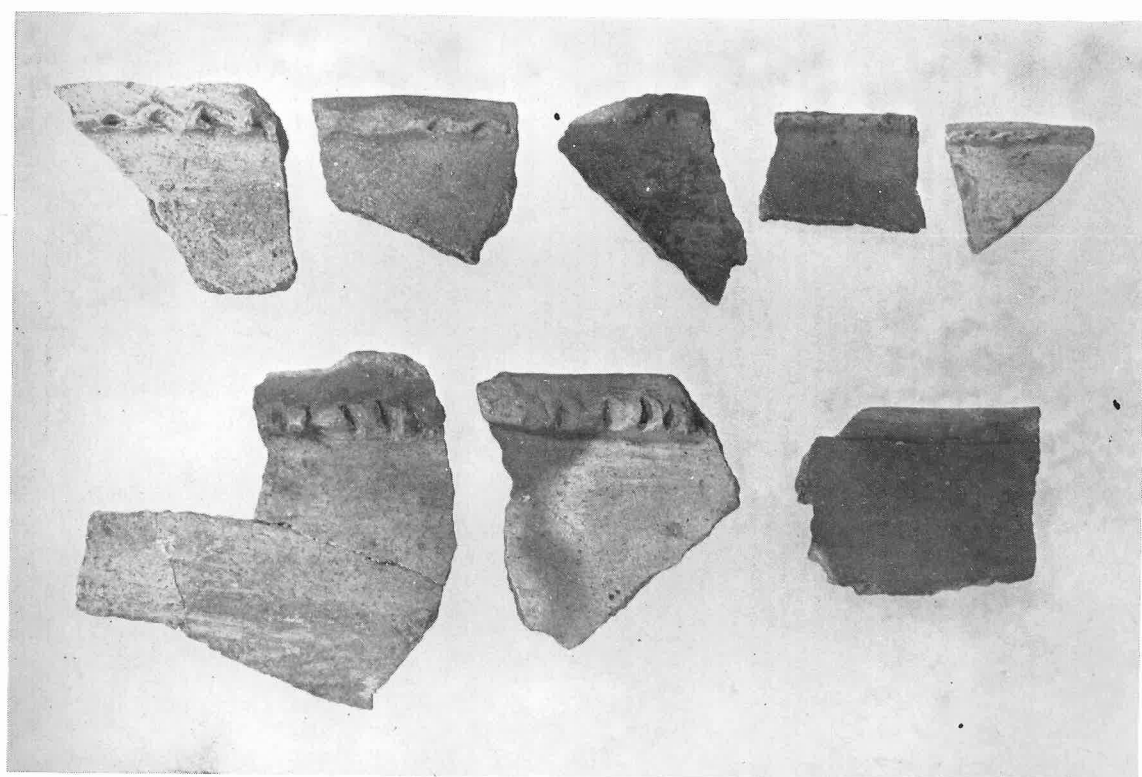
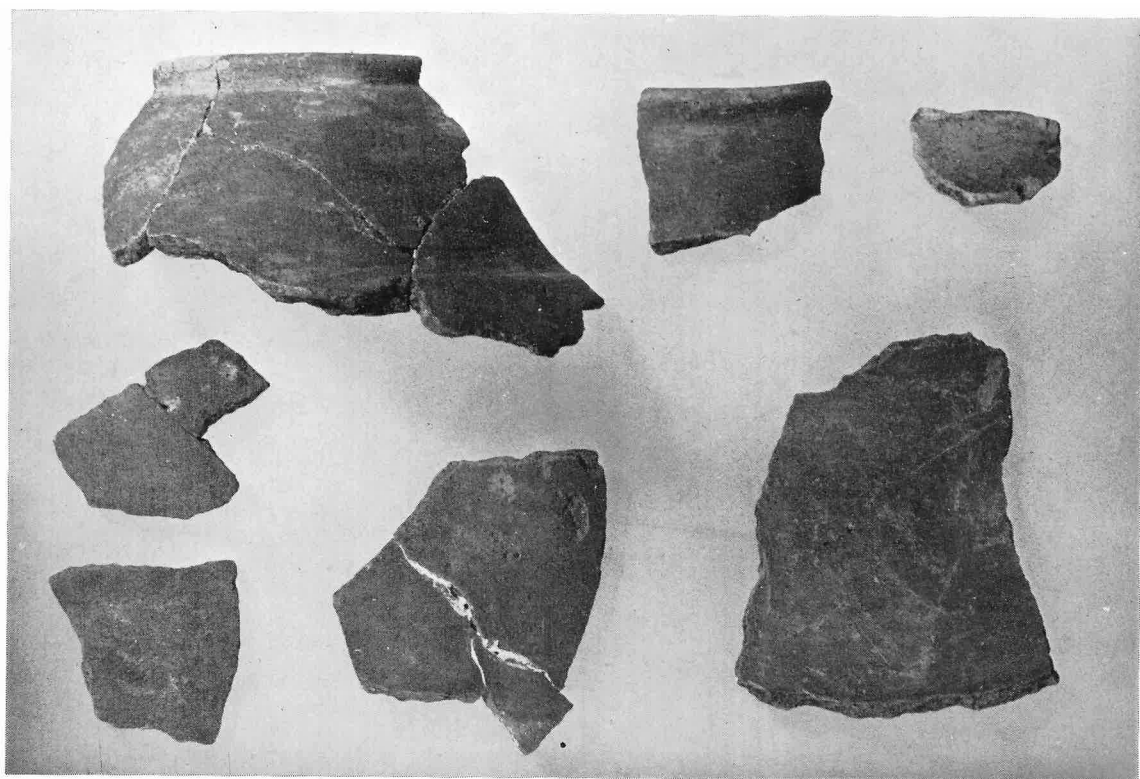


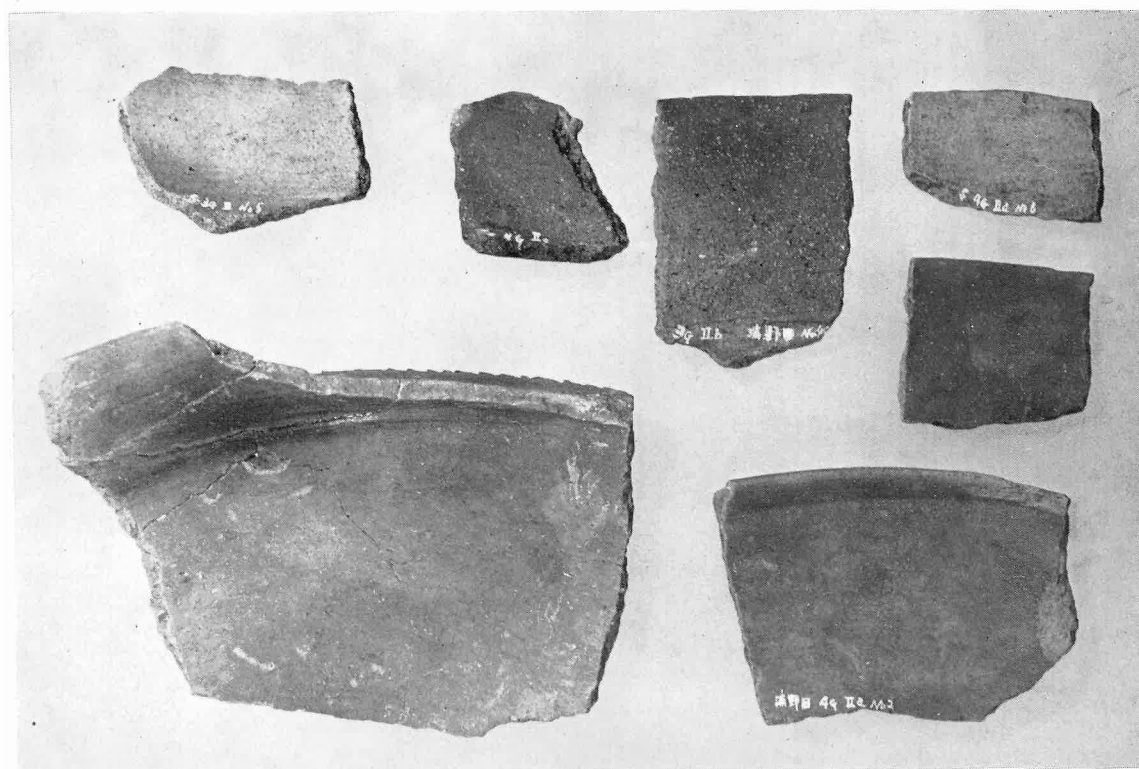
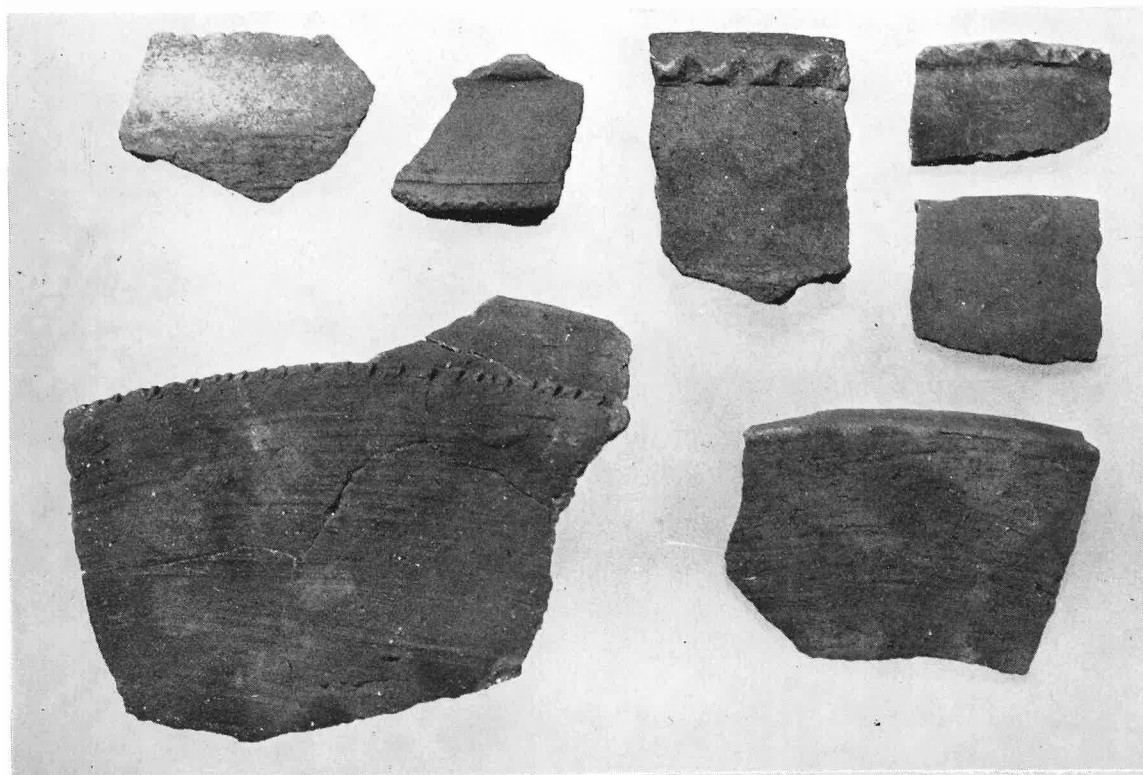
V 層

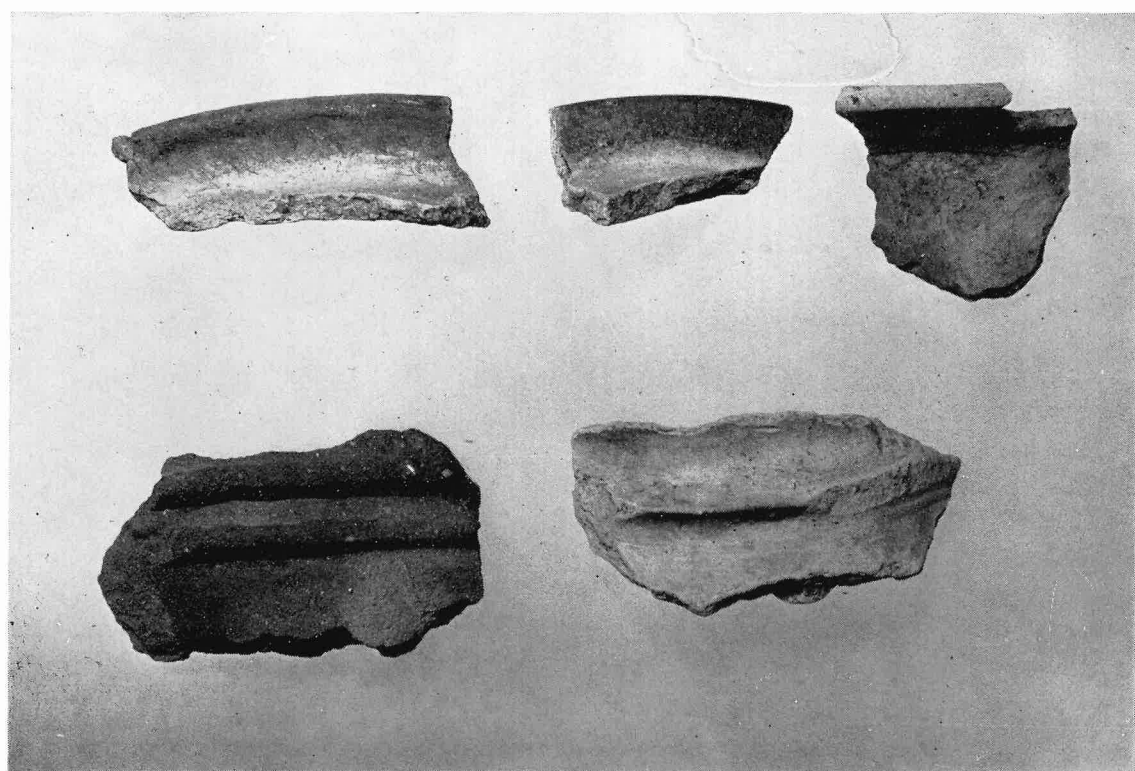
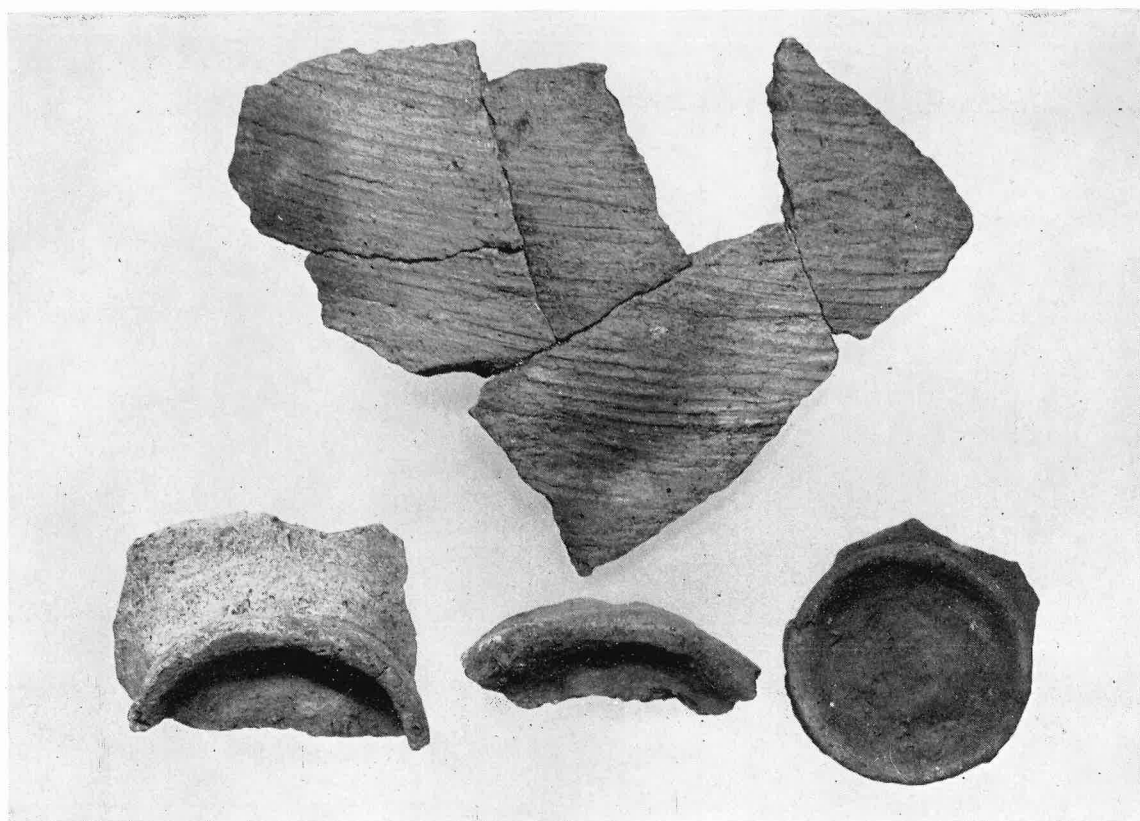
VI 層

VII 層

ナイフ形石器







あ　と　が　き

下黒野遺跡は、県教育委員会が昭和47年12月に実施した埋蔵文化財分布調査によって発見されたものでありますが、昨年、県民福祉の向上と医療の充実のため、大分県民あげて国立医科大学を誘致することになり、下黒野地区を含む大分市と挾間町にまたがる地域がその候補地として選定されましたので、ただちに県環境保健部と協議を行いました。

その結果、遺跡が広範な地域におよぶため、まず予備調査を行い、遺跡の性格を把握し、本調査を実施することができました。

その調査結果については、本報告書にみられるとおり貴重な発見が行われ、今後の研究に大いに役立つものと考えております。

おわりにになりましたが、調査に御協力をたまわりました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

昭和49年3月31日

大分県教育庁文化課長

矢　　野　　朔　　雄

下 黒 野 遺 跡

大 分 県 文 化 財 調 査 報 告

昭 和 49 年 3 月 31 日

発 行 大分県文化財愛護地域活動推進協議会

編 集 大 分 県 教 育 委 員 会
大分市府内町3丁目10-1

印 刷 明 治 印 刷 K K
字佐市大字長洲 597
